

真珠技術研究会

會報

43号



才1卷 才4号

(June, 1963)

目 次

- (1) 寄生虫 (Bucephalus margaritae) の
被害を蒙つたあこやがいの諸観察……大西 侯彦… 1
- (2) そう核時の処理及び条件が
真珠に及ぼす影響について……山口 昇… 5
関 政夫…
- (3) 真珠貝の色彩光環境調整……尾田 方七… 8
- (4) 養殖真珠の輸出と生産の諸問題に就いて…西岡 光夫…16

× × × × × ×

全真連だより

- (イ) 第6回真珠技術研究会……25
- (ロ) 第7回真珠技術研究会……27
- (ハ) 全国真珠養殖漁業協同組合
聯合会の会員並びに役員……33
- 業界ニュース……42
- 養殖場めぐり 大村湾を巡る……白井 祥平…50
- 真 珠 随 筆 堀口初三郎氏の業績から……久米村 優…55
- 編 集 後 記……58

寄生虫 *Bucephalus margaritae* の

被害を蒙つたあこやがいの諸観察

三重県志摩郡浜島町多徳

御木本真珠多徳養殖場

大 西 侯 彦

近年全国的に真珠養殖漁場に於ける寄生虫の発生が目立つ様になりました。

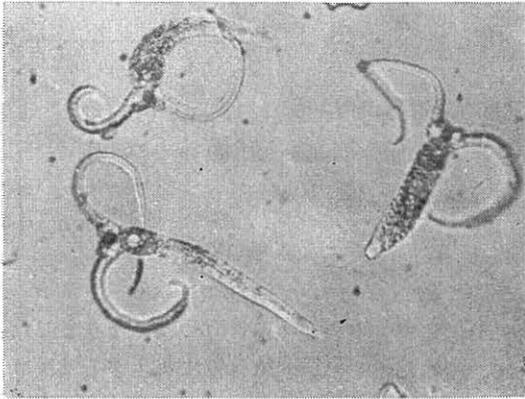
そこで今回は寄生虫のうちで、特にあこやがいの軟体部に寄生するセルカリア *Bucephalus margaritae* Ozaki & Ishibashi についていろいろと観察を行なつたので、これについて述べてみたいと思います。

この種は分類の上から吸虫類に属し、最初あこやがいを宿主として寄生し、セルカリアと云う段階に迄育ち、その後宿主のあこやがいを離れ第二の宿主に移り変るのですが、それはほゞ魚類であろうと推定されています。しかし未だその生活史については明らかにされていません。この寄生虫があこやがいの軟体部に寄生すると嚢状のスポロキストと呼ばれる子嚢を作り次第に増殖を行なつて各組織に蔓延する様になります。肉眼にて一番多く見受けられる場所は、主として生殖巣の部分で、その他鰓軸、鰓葉間連接膜血管、極度に侵されたものでは鰓糸、外套膜、閉殻筋等に及んでいます。このスポロキストと呼ばれる子嚢は淡黄色を呈しているために一見卵と間違いがちですが、良く注意して観察してみると表皮を透して糸層状の塊になつているのが判ります。又卵介であれば挿核の際にメスを生殖巣に入れると卵が流れ出ますが、この様な介では卵は流れ出ずメスを動かす際に正常介とは何か異つた感触がします。

そこでセルカリアを観察するために、子嚢の部分をピンセットでスライドガラスの上に展伸して、海水一・二滴に稀釈してから、100倍率程度の顕微鏡で観察しますと、子嚢の切断された部分から多数のセルカリアが伸縮運動によつて外部に泳ぎ出し盛んに運動を続けるのが判ります。この運動も顕微鏡の下では8~10分程で弱まり尾部を極度に伸長したまま運動は止つてしまいます。

そこでこの様な寄生虫に侵かされたあこやがいの季節別出現率を見ますと、大体8月上旬の盛夏から秋季の高水温期に高率を示すことから、この時期がセ

ルカリアの増殖する最盛期に当るものと思はれます。又丁度この頃はあこやがい
いは産卵を終えた時期でもあり一般の介では既に生殖巣が透明になつている関



子囊より取出したセルカリア

係で、寄生虫も容易に
発見出来ます。逆に水
温の未だ上早期にある
春から夏の頃だとセル
カリアの増殖する度合
も幾分低い為に卵の色
に紛れて肉眼での区別
が困難になるものと思
はれます。高水温期に
どんどん发育したセル
カリアは子囊の中に充
満していますが、やが
て水温の下降に伴なつ

てセルカリアは宿主のアコヤガイを去つて行きます。

11月の中旬、水温が $19\sim 20^{\circ}\text{C}$ の頃になると寄生している部位の色も幾分淡
くなつてくるものも見受けられ、顕微鏡の観察でも数量的に漸減の傾向が伺わ
れます。その後水温も極度に下降し年間の最低水温を記録する1月下旬には、
セルカリアは完全に脱出していますが、各組織に蔓延した子囊はセルカリアを
宿していた時と同じ状態でそのまま残っています。ですからセルカリアの脱出
した後の部分は幾分色が淡く感じられる程度で、以前とは肉眼的に顕著な差は
ありません。そして高水温の9月頃になるとこの空虚な子囊の中には再び二代
目のセルカリアが増殖されてきます。従つてこの種の寄生虫に一度侵されたあ
こやがいはいは、たとえセルカリアが脱出したとしても、そこに残された子囊の中
には次代のセルカリアを作るものと細胞が残されていますからこの子囊を駆除
しない限り回復は望めないこととなりますし、又それは全く不可能な事であり
ます。

ではこの様な寄生虫介を使用して挿核を行つたとしたらどの様な結果になる
でしょう。そこで寄生虫介を材料に二・三の試験を実施してみました。

① 寄生虫介に挿核した場合

50gの三年母介の中から寄生虫の感染程度を肉眼的判断によつて次の段階に
各々100介選別しました。

A・寄生虫の特に多いもの：子囊があこやがいの生殖巣、鰓、唇弁の各組

織にまで蔓延しているもの。

B・寄生虫の中程度のもの：子嚢があこやがいの生殖巣の一部に認められるもの。

C・正常介：対照。

これ等3群の母介仕立てとして2週間、竹籠による方法を用い、使用した核のサイズは8.50, 8.25, 8.00, 7.75, ミリの一ケ入れとし挿核は同一人で担当しました。挿核時期は35年9月10日で水温は2m層で27.9°Cと比較的高水温で挿核には不適期と思われましたが、その結果は第一表に示す通り、挿核後一週間で寄生虫の特に多いと思はれるA群は大多数が斃死し、中程度と思はれるB群では1/3が、又正常介のC群はあまり大きな変化が見られません。

第一表 挿核後斃死数

	35.9.10 挿核介数	9.13 死介数	9.15 〃	9.20 〃	9.25 〃	11.4 〃	計 〃
A	100介	75	4	3	7	2	91
B	100	31	2	2	6	5	46
C	100	0	2	2	3	3	10

② 子嚢破壊がその介に及ぼす影響

上の①試験によつて、挿核手術が寄生虫介に及ぼす影響は短時間の間に斃死という形で現われてくることが判りましたが、その原因の一つとして手術に際しメスによつて子嚢が切断され、そこからセルカリアが血液中に泳ぎ出し体内の各部に分散し、それによつて生理機能に異常をきたすものではないかと考え、もしそれ等が斃死原因の大きな部分を占めているとすれば、別に核の挿入を行なわなくても子嚢をメスで切る事によつてセルカリアを泳出させるだけで可成りの影響が現われるのではないかと推察し、寄生虫の特に多いものを50介選び挿核手術と同様な方法にて手術し唯核とピースの挿入を行なわない処置をとりました。その結果、10日間の斃死数は僅か3介だけでメスによる子嚢切断は斃死の大きな要因でない事が判りました。従つて挿核により大きな斃死の起る事は核を挿入するという機械的的刺激が寄生虫介にとつて最も大きな負担になるものと思われまます。

③ セルカリアの脱出した子嚢のみの母介に挿核した場合

子嚢の中に充満していたセルカリアは越冬する事により総て宿主のあこやがいを去つてしまいます。そこでこの空虚になつた子嚢だけの介を母介として挿

核を行なつてみました。試験に供した母介の寄生の程度は、肉眼観察では上記①試験のA群に属する程度のもので、顕微鏡の観察では子嚢内にセルカリアは全く認められませんでした。介は45gの4年介で170介に8.00, 7.75, 7.50, ミリの一ケ入れとし、母介仕立ては前回と同方法により、挿核は36年7月22日の、2m層水温が27.0°Cの時に行ないました。

第二表 挿核後斃死数

36.7.22 挿核介数	7.25 死介数	7.27 "	7.29 "	7.31 "	9.1 "	10.23 "	計 "
170介	85	17	3	9	23	7	144

挿核後、斃死介の観察は第二表の通り5日間で102介、丁度3ヶ月の10月23日には144介(85%)というようにほとんど全滅に近い多くの死介がみられ、その上残つた26介の内、得られた核数は僅か4個だけしかありませんでした。

④ 寄生虫介の外套膜をピースとして使用した場合

前に述べました様に病巣を観察してみましても、生殖巣を中心に内臓器及び循環系統に多く寄生し、その特に感染の進んだものであつても外套膜や筋肉系の比較的硬い組織に迄及んでいるものは極めて少い様です。この様に極度に侵されたものであつても介殻の内面をちよつと観察すると色、光沢の点では何ら劣つている様に見えません。斯様な事から寄生虫に侵されていても外套膜をピースとして使用性のある事を推測して、正常介にこれを移殖しました。試験方法は前回の①と同様に行い50介に施術を行いました。10ヶ月後、43介から31個の珠を採取しましたが、対照としたものとの比較では斃死、脱核、しら珠、及び珠の品質に付いては(寄生虫介の外套膜をピースにしたものでは、幾分巻き点で薄いと感じましたが)あまり差の無い結果を得ました。先ず相当ひどく感染した寄生虫介であつても、その外套膜に迄及んでいないと肉眼で判断出来るものであれば、ピースとして使用しても生産される珠に期待出来るに思われます。しかし感染の有無をたゞ肉眼的な判断で行つたものでありますから、これだけのものではつきりとピースに使用出来ると言い切る事は甚だ危険な事であり、勿論、肉眼的観察だけで「無い」と判断しても病介である以上、侵入している可能性があるでしょう。又移殖後も正常な真珠袋が形成され、真珠質の分泌も行なうものか、今後も細部に亘つて組織学的に観察を続けて行き度いと思つております。

そう核時の処理及び条件が 真珠に及ぼす影響について

山 口 昇
関 政 夫

(三重県水産試験場)

そう核するときにはピースに色々な薬品を使用したり、あるいは普通使われなような母貝を使用した場合、それが真珠にどのような影響を及ぼすかについて色々報告があるが、その評価もまちまちであるので、これらについての参考資料の一例として予備試験を行つたので簡単に報告する。

試験方法は次のとおりである。すなわち原核を測定して一定値に近いものをえらんで使用し、一項目について処理、無処理（対照）の2群とし、数人の施術者によつてそう核し、静養後X線で脱核、死貝を除き4段金網立かごに収容し、浜島弁天漁場に垂下養殖した。浜揚後、真珠の重量を1個1個化学天秤で測定し、またその評価については全真連の関係者をお願いした。試験項目は次の5項目で何れも2個入れである。

1. 卵戻し貝を使用したもの
 2. 寄生虫貝（卵巣にセルカリア幼生が寄生しているもの）を使用したもの
 3. ピースに感光色素（プラトニン50mg、ネオキシニン100mgを蒸溜水に溶解したもの）を滴下使用したもの
 4. ピースにアクチゾール（蒸溜水溶解）を使用したもの
 5. 普通のそう核法で立かご、平かごを使用養殖したもの（全体の対照）
- 上記のものの養殖経過は次のとおりである。

項目	原核	施術日	X線	浜揚
1, 2	5.5mm	36. 4. 24	36. 7. 26	37. 11. 20
3, 4, 5	4.5mm	36. 7. 3	36. 7. 27	37. 1. 31

結果は表に示すとおりである。平均重量及び評価ではクズ、しら珠は除外してある。なおX線検査まで（沖出前）の脱核、死および浜揚貝数の正確な数字

は不明である。

結果は次のように解釈される。

1 卵貝について

最初に脱核、死を除いて対照群と同数にしたにかかわらず、沖出し後のそれも卵貝に特に悪い結果になつている。また花、胴珠の出現率も18.8%で全項目を通じて特に悪く最低値となつている。すなわち卵貝を除くとクズ、しら珠を含めて花、胴珠の出現率は21.4~41.4%、同じくクズ、しら珠を除くと30.0~54.1%である。また平均評価額も同サイズの他の3群に比較して約半値となつており、平均重量(巻き)も4群中最低となつていて、あらゆる点において劣ることが示される。

項目	個数			平均重量 mg			評価 (匁当円)		
	花胴	スソ	クズ白	花、胴	スソ	平均	花、胴	スソ	1個平均
1 卵貝 対照	3	16	0	357.7	331.7	335.8	550	60	12.74
	9	14	6	358.1	340.1	347.1	460	120	23.83
2 寄生虫貝 対照	15	16	12	351.9	349.3	350.5	550	60	27.84
	6	14	8	367.7	355.9	359.4	500	150	24.65
3 感光色素 対照	109	153	56	182.2	172.4	176.5	660	180	18.02
	82	162	46	195.4	178.3	184.1	650	200	17.76
4 アクチゾール 対照	8	11	7	183.9	171.8	168.5	400	120	10.53
	6	8	7	175.2	170.8	172.6	600	150	15.93
5 平かご 立かご	99	84	56	176.2	172.6	175.0	640	160	17.55
	60	126	71	179.1	170.2	173.8	550	160	14.68

2 寄生虫貝について

花、胴珠の出現率はむしろ寄生虫貝に高く、またその平均評価額も対照群よりわずかに高くなつている。しかし脱核率は対照群の方がはるかに小さい(試験貝数は約半数)。また巻きも対照群の方が良くなつており、この場合そう核から浜揚までの死を含めての全脱核率及び施術の難易などが問題となるだろう。

3 感光色素の使用について

脱核率では余り差がなく、わずかに対照群が悪くなつているが、花、胴珠の出現率は感光色素を使用したものに明らかに高くなつている。特に花珠と認められたものがあるのは全項目を通じて本処理群のみであつた。しかし巻きでは

対照群の方が明らかに良く、同サイズ中最高を示している。しかし感光色素を使用したものは他の項目のものと比較すれば、ほとんど同レベルにあるので、この処理は巻きには影響を与えないが、良質な真珠を生産することに効果があるといえよう。たゞそう核時の只1回の処理で、真珠の品質に大きな比重を占めると思われる浜揚前の表面の真珠層が影響されると考えるのは可成疑問でもあるので、この点については改めて追試してみる考えである。

4 アクチゾールの使用について

供試数が非常に少ないが、脱核率及び花、胴珠の出現率とも両者の開きはほとんど認められない。これは主として真珠そのものより、単に染色、標識としての価値から使用されるから沖出前の脱核率が主な問題となるだろう。評価は処理群にかなり低くなつており、巻きに及ぼすマイナスの影響ということもわずかに示されるようであるが、処理数が少いためはつきりしたことは云われな

5 かごについて

脱核率はほぼ同様であるが、花、胴珠の出現率は平かごに高く、全項目中最高である（クズ、しら珠を含めて41.4%、除外して54.1%）。このため平均評価額も平かごに高い。また巻きはわずかに平かごによい程度である。立かごは普通の平かごに板で仕切りをつけたものであるので、このことから現在一般に使用されている合成繊維製のかごについて推定することはできない。

全体を通じて花、胴珠とスソ珠の巻きについてみれば、スソでは突起などが多いにかかわらず、例外なしに明らかに花、胴珠は巻きがよく、当然のことながらよい珠は巻きが厚いといえる。これらの結果で統計的にその差に意味があると認められるのは、感光色素の項目での巻き、及び花、胴珠の出現率ならびに平かご、立かごにおける後者のみであつて、予備的試験であつたため試料数の吟味が不充分のため差が認められなかつたと思われるものが多い。なお薬品を蒸溜水に溶解したのは処方ならびに一般業者の方法に順じたものである。薬品処理についての本調査は今年度実施中である。

真珠貝の色彩光環境調整

尾 田 方 七

(株) 真 研

*水産庁昭和37年真珠養殖事業審議会議事録によると昭和36年輸出実績60,000Kg、金額3,600万ドル、海外需要は順調な伸びが期待され、昭和37年全国 施 術 貝数215,999千個、浜揚げ予想75,000Kg、養殖漁場は25府県に及び筏台数156,175台、輸出の上昇を目前にして生産状況は量的にはたしかに著しい成長であるが一面漁場の密殖或は老化による品質低下が特徴的であると警告し、今後生産体制の合理化、適正規模への転換、密殖防止による品質向上の必要性を強調している。

圧倒的な科学技術の進歩の中にあつて、真珠産業も技術内容を再検討して新しい姿にきりかへて前進しなければならない時期が来ている。具体的には生産体制の合理化以前に真珠の品質維持向上と無駄のない生産をする技術を開発することが必要である。元来真珠の仕事は性質上手先きの経験を重視しなければならない産業ではあるが、経験を技術と混同して珠を作ることを云わば名人芸のように取り扱う傾向があり基本的問題の解決なしに今日に至つているので、他の産業にみる本当の近代的技術領域の開発が遅れている。商業主義一辺倒で来たことにも原因がある。このズレはもはや経験の積み重ねだけでは解決出来ない段階にある。こゝで感覚を新たにして生産過程の再検討を行ないその方向が正しい進歩を生み出す科学的手法を取り入れて技術の中味を充実する足固めをしなければ将来の企業的安定はない。

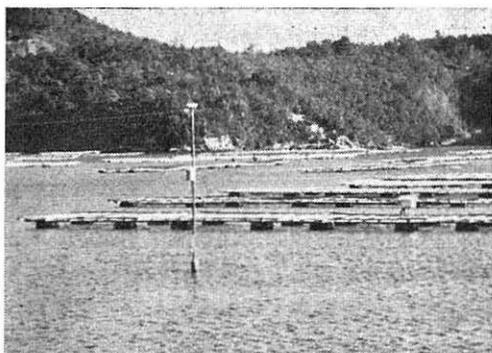
こゝに真珠養殖技術近代化シリーズの一環として脱核、巻き、歩止りなど身辺の基本的問題に関係のあるカクテルライトによる環境調整の概要を述べて読者の批判を仰ぎ真珠養殖技術開発の糸口となれば幸いである。

真珠貝は夜行性の動物であるから夜間活動性になる。プランクトンは自然の状態では昼夜間に週期的移動を行ないそれを摂取する真珠貝の食性に密接な関係を持つ。夜間の真珠貝の活動と貝が摂る餌をコントロールするテダテとして放電灯の混合色彩光を用い、真珠貝に新しい環境を与えて真珠を養殖する色彩

※ 水産庁：真珠養殖事業審議会第15回会議議事録、昭和37年2月15日

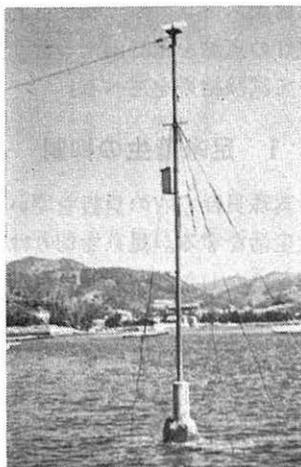
光による環境調整（カクテルライト、コンデイショニング、以下CLCと略称する）の方法を試験した。

図 1



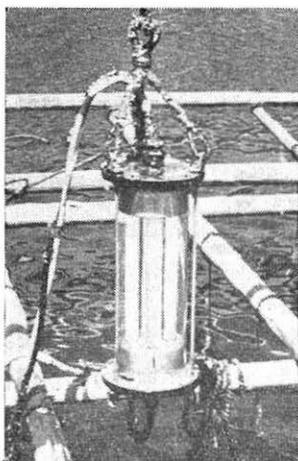
左岩礁に立つ鉄柱と右CLC筏上のスイッチボックスの間は海底をキャプタイヤコードで連絡する

図 2



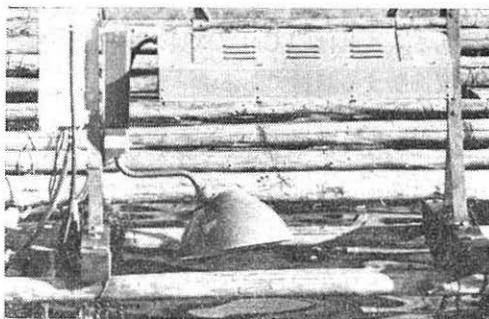
鉄柱上部に光電式自動スイッチを取り付け先端の表示灯によつて水中灯の点滅を確認する

図 3



筏上に引き上げた水中灯

図 4



補助的に使用する水上灯

整型水中放電灯 1 基を筏の中央、目的の環境水域の深さに垂下設置する。放電灯は30W又は20Wの蛍光管 4 本を入れ波長4,860Å[°]又は4,870Å[°]の白色蛍光管 2 本と波長6,070Å[°]のピンク蛍光管 2 本の組み合わせとする。補助的に筏上に水上灯を設置併用する場合には広範囲透過性をもつ波長5,280Å[°]の緑色蛍光管を用いる。放電灯と海岸電源の間は海底をキャブタイヤ・コードで導き、光電式自動スイッチで朝夕自動的に点滅し、表示灯を用いて遠方からでも水中放電灯の点滅を確認出来るように装置する。以下CLCを行つた6つのケースについて試験結果を述べる。

1 足糸着生の抑制

真珠貝は左右の貝殻を開いて外に足を伸ばし足糸を分泌して他物に附着し着生生活をする。足糸を切りはなせば新しい足糸を出して再び着生する。足糸を切りはなした貝が新しい足糸を出して附着する場合、真珠貝は夜行性であるから昼間と夜間で足糸の出し方が違う。

真珠貝各 400 個について常態と昼夜間放電灯照射を行つたときの、昼間と夜間の足糸を出して着生する貝の割合を比較すると、

	昼 間	夜 間
常 態 (昼間明、夜間暗)	6.5%	69.5%
昼夜間放電灯照射 (昼間明、夜間明)	5.0	17.5

常態では昼間6.5%、夜間69.5%、昼夜間放電灯照射を行えば昼間5%、夜間17.5%である。昼間と夜間

について常態の場合と昼夜間放電灯照射の場合を考えると、昼間は常態が6.5% 昼夜間放電灯照射が5%、夜間は常態が69.5% 昼夜間放電灯照射が17.5%である。昼間、常態は6.5%、昼夜放電灯照射が5%で大差なく昼間放電灯照射の影響がないのは当然である。併しながら夜間は常態69.5%、放電灯照射が17.5%である。これはCLCが真珠貝の夜行性を制御して夜間の足糸着生の活動を50%程度抑制する証據である。

2 施術貝静養期間中の脱核防止

核入れ施術は真珠貝にとつてはむしろ絶対安静を必要とする大きな手術である。2週間乃至1カ月の消耗回復の期間を静養期間として別に取扱うのが慣例である。併しながら自然の環境そのままでは夜間真珠貝は活動性になつて安静が保たれない。のみならず核挿入後の異物反応による筋の緊張のため核、細胞の定位置への着床が乱され進んでは核が体外に脱出することが起る。CLCの環

境の中に置けば貝は安静状態を保つて消耗を防ぎ、手術による虚脱と筋の緊張を解いて核、細胞の移動と体外脱出の機会が少くなる。

同一条件で施術した7.5mmの核1個入れの貝100個を常法と比較、2カ月間の死貝、核が脱出した生貝、核を保有した生貝の個数を次に示す。

	1 カ 月 後			2 カ 月 後		
	死貝数	脱核貝数	核保有貝数	死貝数	脱核貝数	核保有貝数
CLC	3	6	91	1	3	87
常法	5	13	82	2	6	74

貝の死は実験に関係なしと看做して脱核貝数だけを考えるとCLCは1カ月後7個、2カ月後3個、合計10個少い。貝の死も含めて2カ月後核を保有した貝数でみると13%の歩止り増加となる。

真珠の挿核は貝の状態と施術者の手際にかゝるが挿核が終つた後は局所の組織反応と相俟つて進行する核と細胞の着床の状況で真珠の出来がきまる。貝体内の組織形成は挿核の手際では処理できない範囲に属するが之が真珠形成の主役である。この領域に関しては従来無関心で何等手が加えられていない。CLCは挿核の手際で処理出来ない範囲にじかに手をとどかせて真珠を作る条件をコントロールする一つの方法である。

3 真珠分泌の増進と正常化

(a) 施術後真珠の出来はじめの分泌増進

直径4.85mm、重量169mg（100個の平均）の核1個入れの貝240個を1群とし実験群、対照群について2カ月後40個、3カ月後40個、4カ月後160個から取り出した真珠の直径と重量の平均の増加が次表のようになった。

	実 験 群		対 照 群		CLCの真珠分泌増進	
	直 径 mm	重 量 mg	直 径 mm	重 量 mg	巻いた厚さ 倍	巻いた重量 倍
2 カ月	5.26	220	5.23	205	1.08	1.4
	0.41	51	0.38	36		
3 カ月	5.58	275	5.33	225	1.5	1.9
	0.73	106	0.48	56		
4 カ月	5.91	305	5.39	230	1.9	2.2
	1.06	136	0.54	61		

※ 各月下段の数字は核自身の直径、重量を差引いた分泌による増加量である。

4カ月間の真珠の巻きの経過がCLCを行つた実験群は対照群に対し厚さで1.08、1.5、1.9倍、重量で1.4、1.9、2.2倍である。

(b) 採取前の真珠の分泌増進

2年間養殖した同じ条件の7mmと6.5mmの核2個入れの施術貝2枠の各々を2,800個（1籠35個入り、80籠吊り）となし一方を真珠採取前2カ月間CLCを行ない対照と同時に採取して真珠の全量を比較した。

	籠数	採取貝数	採取真珠	貝1万個 真珠量	選別 クズ珠	浜揚珠
実験群	60	2,076	2,150g	10,350g	540g	1,610g
対照群	80	2,682	2,350g	8,760g	610g	1,740g

※ 実験群は80籠の内20籠は実験を経続するため採取を延期した。

実験群は、採取貝1万個に換算した真珠の収量10,350g、対照群8,760gでその差1,590g、対照に対し17%の歩止り増加である。

次に実験群、対照群の浜揚珠を良いもの、わるいものに分けてその割合と珠の出来を表で示す。

	浜揚珠	選別	目方	割合	出来	
実験群 60籠 貝2076個 採取	1,610g	上珠 { 花珠 花一等 下珠 { 胴珠 スソ	195g 257g 918g 240g	12% 16% 57% 14%	ピンク、白系目 立ち“テリ”良	
対照群 80籠 貝2682個 採取	1,740g	上珠 { 花珠 花一等 下珠 { 胴珠 スソ	191g 262g 1,032g 255g	11% 15% 59% 14%		色目“テリ”普通

対照群は下珠（ゲダマ）の割合が多いが実験群は上珠（ジョウダマ）の割合が多い。実験群の珠の特徴は全体的に所謂“テリ”がありピンク又は白系の色目が目立つ。このことはCLCが真珠の色目、テリに影響を与える、即ち真珠質分泌機能を正常化することを証明する。

4 真珠貝の稚貝採苗

真珠貝の産卵期中幼生の出現時期を見計らつて筏に附着器“杉葉”10個を吊

り下げ放電灯を採苗水位に垂下、夜間照射して3カ月後の稚貝収量をCLCを行なわない常法と比較した。

	附着 稚貝量	附着器 1個稚貝	稚貝の 発育	殻高
CLC	9.3Kg	930g	良	18mm
常法	5.0	500	普通	15

稚貝の収量、実験群は対照群の1.8倍、附着稚貝の発育は実験群が大きめで殻高18mm、対照群15mm。この結果からみてCLCの効果を次の如く要約する。

- (I) 夜間採苗水域のプランクトンの週期的移動を調節して幼生の餌料状況を改善する。
- (II) 放電灯のカクテルライトに浮游期幼生が集まり採苗水域の幼生個体数が増加する。
- (III) 匍匐期に達した幼生はCLCによつて附着器によくなじみ安定して他に移動、逃亡しない。
- (IV) 足糸着生期にはいつた稚貝は好適なCLCの場にあつて安定を乱されることなく順調に発育する。

以上CLCは真珠貝発生初期の浮游期幼生の時代から足糸着生の稚貝に発達するまでの生育期間を通じ、夜間の活動をセーブして附着、安定、成長に好条件を与える。

5 真珠貝の成長促進

殻高約3cmの稚貝500個を選んでCLCを行つた後、同条件の対照群と比較した。右表の通りはじめ目方、実験群2.85Kg、対照群2.8Kg、1カ月後1Kg当り個数、実験群96個に対し対照群105個、実験群は1割の増量である。更に3カ月後、実験群51個に対し対照群61個、実験群は2割の増収となる。

		実験群	対照群
はじめ	個数	500	500
	目方 Kg	2.85	2.8
	1Kg当り個数	175	178
1カ月後	個数	480	485
	目方 Kg	5.0	4.6
	1Kg当り個数	96	105
3カ月後	個数	479	480
	目方 Kg	9.3	7.8
	1Kg当り個数	51	61

稚貝の個数が実験群1カ月後480個、対照群485個、3カ月後実験群479個、対照群480個となつているのは死による減りであつて実験には関係がない。貝の大きさについては実験群が成長よく、大きいもので殻高1カ月後4cm、3カ月後5cmであつた。

6 真珠貝の夜行性制御と真珠質分泌増進を

同時に証明する実験

真珠貝の外套膜と貝殻の間、外套膜中央上部に密着させて $12 \times 15 \times 0.5\text{mm}$ の白色セルロイド板を挿し込んだ60個の貝を20個ずつⅠ、Ⅱ、Ⅲの3つの群に分け次のように処置する。

Ⅰ 昼間明、夜間明

貝が光を受け易いようにクレモナ・チヨウチン[※] 籠^{図5}に入れてCLCを行なう。

Ⅱ 同様クレモナ・チヨウチン籠に入れてCLCを行わず、自然の状態にする。

Ⅲ 昼間日光を遮ぎるためコールタールで染めた木蓋付き竹籠（^{図6}）に入れてCLCを行わない。

図 5

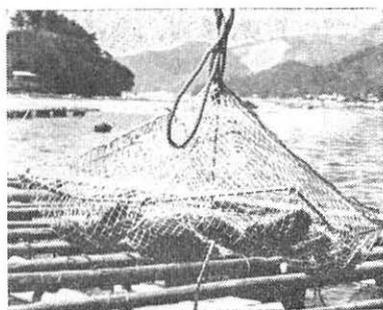
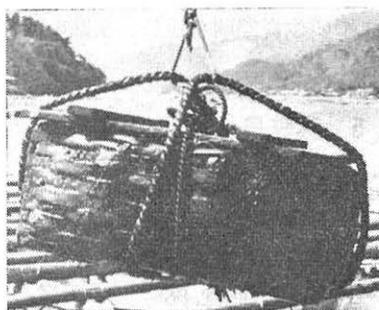


図 6

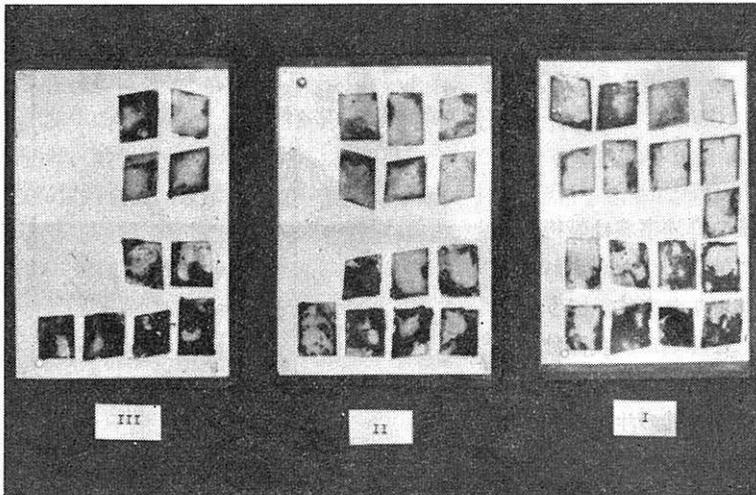


1カ月後セルロイド板を取り出した結果を表で示すと

処 置	セルロイド板の “止 り”		稜柱層、真珠層の被着			
	脱 出 したもの	脱出した もの	稜 柱 層		真 珠 層	
			個 数	分 泌	個 数	分 泌
Ⅰ	3	17	9	+	8	+++
Ⅱ	7	13	7	++	6	++
Ⅲ	10	10	6	+++	4	+

図7はI、II、IIIの各群から取出したセルロイド板である。

図 7



Iの上3段、II、IIIの上2段が稜柱層を分泌したもの、夫々の下2段が真珠層を分泌したセルロイド板である。空所はセルロイド板の脱出を表わしIが3個、IIが7個、IIIが10個である。稜柱層を分泌したものはIが9個、IIが7個、IIIが6個でI、II、IIIの順序に分泌が多い。真珠層を分泌したものはIが8個、IIが6個、IIIが4個で分泌は稜柱層と反対にIが顕著、IIが中等度、IIIが弱い。以上を総合して本実験はCLCが真珠貝の夜行性を制御してセルロイド板脱出を少なくすること、稜柱層の分泌を真珠層の分泌に切替えて正常な真珠層の分泌を促進することを暗示するということが出来よう。

CLC法は真珠養殖に対し適正な環境をつくるのに有効なカクテルライトの波長の組合せ、照度、照射時間、照射方法などなお吟味しなければならない問題が残されているが、今回ピンク一昼光色のカクテルライトを使用して基本的な問題である脱核防止、巻き、歩止りについて期待出来る試験結果を得た。真珠貝を取り扱うのには貝にフミアリーになることが第一である。それには真珠貝の性質を一つ一つ知つてゆかなければならない。CLCは真珠貝の夜行性をクローズアップしたもので貝の夜行性を頭に置いて貝を取り扱うことは将来真珠養殖の上のあたりまえの大切な一つのポイントとなるであろう。

本実験を行なうに当つて海岸電源と実験筏の中継のために漁場内の岩礁に鉄柱を建てることについて地元三重県度会郡南勢町船越漁業協同組合の御協力を得たことを感謝致します。

養殖真珠の輸出と生産の諸問題に就て

西 岡 光 夫

(全真連相談役)
(アサヒ真珠株式会社社長)

我国の真珠事業は戦後順調に伸びて来た恵まれた産業であります。云うまでもなく真珠は我国独自の生産品で海外に競争品がなく、其の生産の90%が輸出され外貨を稼いでいるので、我々には今後此の恵まれた産業を子々孫々に残す立派な事業として確立する責任があると思います。然るに現



昭和三十八年三月二十日第六回真珠研究会講演

状を見るとどうであろうか、憂ふべき要素が、養殖、加工、輸出の各部門に現われて未解決のまま残されております。本年一杯は大丈夫だろう、或は2、3年は大丈夫だろうと云う風に恰もいつ爆発するか分らぬ爆弾を抱いて事業をやっている様な感じがするのであります。

先日元農林大臣の周東先生を囲んで座談会がありました、其の席上先生が日本の輸出のやり方、其の欠陥等について先年欧州へ行つた時に感じられたお話や欧州のE E C等のお話もありましたが、国と国との間の難しい集りでも同一歩調を取る事が利益である事が分るとE E Cと云う欧州の経済的な連邦が出来るのであります。

今や其の経済力は米国に匹敵するとの事であります。その様な欧米人の考え方から見ると真珠の様に他国に競争品のないもので値段を安くする事は、買手も迷惑するのに何故もつと市価安定が出来ないのか。又こんな立派な品物を何故増産して品質を低下さすのか、その様な重大な共同の利益に僅かの業者が協力出来ないのか、全く諒解出来ないと云う事は私自身も何度も聞かされて来

ました。俺だけは大丈夫だと云う目先だけの利己主義を捨て、養殖業者は全真珠連を中心に協力して、此の良い産業を永遠に育てるべきだと思うのであります。

○輸出の問題について

先ず輸出の問題について申し上げたいと存じます。

昭和28年の輸出高は金額で18億5千600万円、数量で1963貫で其の頃は毎年金額で40%、数量で50%づつ伸び、31年以後は32年度の数量11.9%、33年度は金額7.2%以外金額、数量共に20~30%づつ伸びております。37年は前年に較べ数量は同様の16.600貫、価額は約16.9%増の150億円強となつております。

表1 最近の真珠輸出実績

年 度	数 量	伸長率	金 額	伸長率
	貫		万円	
昭和28年	1,963	%	185,600	%
29	3,180	62.0	260,600	40.4
30	4,810	51.3	361,400	38.7
31	6,214	29.2	479,500	32.7
32	6,952	11.9	594,000	23.9
33	8,956	28.8	636,500	7.2
34	10,914	21.9	856,400	34.5
35	13,863	27.0	1,064,500	24.3
36	16,049	15.8	1,288,400	21.0
37	16,603	3.5	1,506,800	16.9

(注) 1. 数量は貫未満四捨五入、金額は万未満四捨五入

2. 伸長率(%)は前年度に対する率

上の2つが何れも原因していると思います。

輸出先からは市価が変動し過ぎる点と不良真珠特に薄巻真珠の輸出を止める様苦情が来ております。

薄巻真珠の防止策としては、輸出検査のグレードを引上げて輸出させない様にするのも一策ですが、これは内地へ売の場合にも問題があります。本年は事業者協会の会員だけでも薄珠は買わない様にする筈になつております。そして薄巻珠は損をすると云う様に損得で分つて貰う以外百の説法も無駄だと思いません。

本年の見通しとしては、先日輸出組合理事会で意見交換しましたところ、大体昨年と変わらず少々頭打ちの状態と云う事に落付きました。この伸び悩みの原因としては

- (1) 価額の変動が激しいので商売が不円滑になつた事
- (2) 米国、国内共に八ミリを除いてはストックが少ない点及び真珠生産の状態から考えて、輸出適格品の量が少なく1万5,6千貫程度しかない事

○日本真珠養殖事業者漁協について*

一貫業者18社が日本真珠養殖事業者漁協を設立して、この3月28日創立総会をする事になっております。

表2 日本真珠事業者協会員

アサヒ真珠	帝真貿易
岩常真珠	鄭旺真珠
大月真珠商会	日賀
覚田真珠	富士真珠
北村真珠	みつわ真珠
極東真珠	御木本真珠
真和真珠	村田真珠
高島真珠	山勝真珠
大洋漁業	横田商会
田崎真珠	

組合長は山勝氏に内定しております。此の新しい漁協は全真連傘下に入つて全真連の一員として、協力する事になります。

此の組合は大手筋を網羅していて、真珠の生産でも其の系列を合わすと全生産の半分以上を生産しておりますし、加工業者としても全加工量の、7、8割を加工しているものと思われま。全真連としては養殖業者としてよりも買手側として協力して貰う面が多く、又養殖業者からは買手団体と見る向き

が多いと思います。卒直に云つて養殖事業者漁協を利害相反する対立的立場に考えている傾向が特に最近強くなつた様に感じます。昨年もある地区で「共同加工をして Netz クレスを生産しよう」と云う申し合わせをしております。

養殖業者の組合としては、共同加工と云う事は組合事業として最も適した仕事で、理想ではありますが、果して出来るかどうか今の各組合に対する組合員の協力程度、団結程度では、その実現が難しいと云つてもよいと思います。そうすれば当分は事業者漁協を中心とした加工業者に売る外ない状態と思いません。

又此の組合員は養殖業者としての比重も大きい事でもありますので、対立的立場に置く事は、其の原因が其の何れにあるかは別として、真珠業界に取つて非常なマイナスであると申さねばなりません。

今回全真連傘下へ此の組合が加入するのを契機として名実共に一つの傘の中へ入り、意志の疏通を図り、生産、販売両方面に於て協力して貰う様持つて行くべきであると考えます。私個人としてもたとえどんな誤解があろうとも、縁の下での力持になつてこの協力実現に努力したいと思つております。

○養殖に関する問題点

* 事業者漁協の設立は諸種の事情が起り後日に持越される事になり当分現在の日本真珠事業協会の名称の訳であるが農中及び全真連との関係は事業者漁協が出来た場合と同様に運営して行く事に双方諒解が出来ている。

1. 最近数年間の業界の推移

戦後順調に延びてきた真珠業界に第1回のパニックがやつて来たのが昭和29年です。その当時の生産量は年間5千貫足らずで現在の $\frac{1}{4}$ 程度でしたが、それ迄は業者各人が自由に生産をして組合はたゞ入札会で品物の販売斡旋だけしておりましたが、それが行詰つて来たのであります。其の時程、真剣に業界が団結した事はありませんでした。

その結果、もみにもんで出来たのが農中資金による現在の共販制度です。

これは奇蹟的と云つてもよい程の効果があり30年、31年と市価は安定し順調に推移したのでありますが、其の時既に第2の危機の下地が出来ていたのであります。

即ち共販によつて市価が安定すると、既存業者は増産に努め、又新規業者が簇出する。

これは共販の裏付けとして生産規制をやらない以上当然の帰結であつた訳です。

表3 浜揚価格の推移表

	三ミリ未満	三、四ミリ	五ミリ	六ミリ
32年度(32.9~33.8)	750 ~ 800 ^円	410 ~ 460 ^円	380 ~ 430 ^円	350 ~ 400 ^円
33年度(33.9~34.8)	670 ~ 720	380 ~ 430	330 ~ 380	430 ~ 480
34年度(34.8~35.9)	580 ~ 630	430 ~ 480	300 ~ 350	330 ~ 380
35年度(35.9~36.8)	640 ~ 690	450 ~ 500	400 ~ 450	420 ~ 470
36年度(36.8~37.8)	870 ~ 920	520 ~ 570	550 ~ 600	550 ~ 600
37年度(37.8~38.1)	1,500~2,000	570 ~ 630	580 ~ 640	600 ~ 700
	七ミリ	八ミリ	九ミリ	
32年度(32.9~33.8)	450 ~ 500 ^円	2,000 ~ 2,500 ^円		
33年度(33.9~34.8)	550 ~ 600	2,300 ~ 2,800		
34年度(34.8~35.9)	700 ~ 800	2,500 ~ 3,000	4,000 ~ 5,000	
35年度(35.9~36.8)	650 ~ 700	1,800 ~ 2,300	4,000 ~ 5,000	
36年度(36.8~37.8)	680 ~ 730	1,200 ~ 1,500	1,800 ~ 2,300	
37年度(37.8~38.1)	750 ~ 850	1,000 ~ 1,300	1,500 ~ 2,000	

32年になつて最も作り易い3・4ミリが増産となり暴落し、33年、34年には5・6ミリが300円位に暴落したのは皆様もまだ記憶に新たな所と思います。

其の後は暴落した4～6ミリ珠の生産をやめて段々と大珠へ切換えたので、35年には7ミリが下落、36年より8ミリが暴落して現在の5、6ミリ珠高、8ミリ安の時代になつたのであります。この様にサイズのアンバランスによつて、2、3年目毎に市価が乱調子に変動しております。然し此の間に業者数は急激に増え、今では29年当時の苦境時代を知らぬ業者の方が多くなつております。又生産の規模も大巾に異つて来まして、其の当時の全国真珠漁協の組織では運営が困難になつて来まして、36年3月全真連に改組され、再発足したのであります。

2. 現在の諸問題

全真連組織になつてから2年近くになりますが、直ちに業者の期待する様な成果を挙げる事は困難であります。此の幾多困難な問題が多い時代を業者一同が長い目で全真連を中心として解決して行つて欲しいものと思ひます。現在直面している問題を申し上げて見たいと存じます。

(4) 増産問題

昨37年度の生産高(商品真珠)は、国内需要が1割あると見て合計1万8千貫、金額で170～180億円に上るとおもわれます。

37年度の養殖作業数は貝数3億万介(水産庁割当は約2億万介)と云われております。この作業数のみを見ますと、本年秋は大増産が予想されるのですが、これが案外に大した増産にならぬのではないかと云う見方も出来るのであります。それはどう云う事かと云うと限られた漁場で増産する結果、密殖となり漁場が老朽化して作業員の死亡率の増加、1貝当りの歩留りの低下が著しくなつております。

此の現象は特に三重県に於て著しく、愛媛、九州地区ではまだまだそこ迄は至つてはいないようです。現在私の関係している三重県の工場の例で見ると、2年物6、7ミリで採取時の歩留り1万貝に1貫200匁位、施術数量に対する死亡率四割で結局施術個数1万介に対し約700匁となつていて、数年前の60%位になつております。其の上品質の低下と云う景品迄付いております。

云い換えると、高い母貝、高い核、高い人件費を使つて其の半分近くを海に捨てる様な事やつております。

こんな状態で養殖が儲る訳は無いと思ひます。現在は8ミリ以上を作つている中業者以上は苦境にあり、5、6ミリ中心の小業者は恵まれていて云われておりますが、一部を除き実態は左程良くないと云うのが現状で無いかと思ひます。又過去の歴史が示す如く5、6ミリもそろそろ危機がやつてくるかも知れません。

業者としては相当自重すべき時代だと存じます。

過去をふり返つて見て、ここ数年間に生産量、業者数共に4、5倍に増加しております。この様に真珠事業の恩恵を受ける範囲が広くなつたと云う事は社会的に見て結構だと思いますが、広範囲になつただけに色々の対策が困難になつて来たと云う事が出来ます。

次に将来対処する方法を私見を混えて申し述べたいと思います。

3. 今後の対策

然らば其の対策は如何と云う事ですが、参考迄に私見を申し述べます。

(イ) 個人的立場からの対策

何の仕事でも人の後を追つては駄目なので、人と反対のやり方をやれとよく云われます。これを養殖にあてはめて見ると、現在の流行は数だけ沢山やつて密殖し、早むきをする。薄い品質のものを数多く作つているのですから、其の反対に先ず作業数を少なくする。サイズは何がよいかと聞く人もありますが、サイズは何でも自分の技術、漁場資力に適したものをやつて、厚巻の良いものを作るべきで、私の工場では本年はサイズを落とし、作業数量を3割減とする計画です。

厚巻のものを作れと云つても、最近では早あげで薄巻を早く売の方が有利だと反論する人があろうかと思ひます。

成程2、3年は其のような傾向があつたと思ひます。然しこれからは其の反対をやれと云う訳です。長い目で見て私は敢て厚巻、良質のものを数少なく作る方が有利であると信ずるのであります。

養殖業者で成功した先輩で誰一人早あげの人がありませんか。

黒貝で売つたり、薄むきをすると其の時は儲つた様でも悪循環で終局的には失敗に終る事は、多くの実例が教えて呉れております。又薄巻玉に対しては、先に申し上げた通り海外の非難があり、事業者協会としては此の秋から薄玉不買の申し合わせをしております。

薄巻のものを作る事が損だと云う事はつきり示す事が業界の為であると思ひます。

(ロ) 業界全体から見た対策

次に業界として全真連を中心として為すべき事は余りにも多いのであります。

三重県下では密殖の対応策として県条例で筏を規制していますが、もうこれ以上減らす事は不可能と思ひます。然し密殖によつて漁場は老化し母貝は寄生虫が多く、真珠は極端に品質低下しているのです。此れが対策とし

て去る15日に御木本会長等全真連の幹部と一緒に三重県主脳部と会談しました。

松尾副会長は漁場若返りの方法として、国立真珠研究所の推奨するポンプで空気を注入して海底を攪拌する設備をそなえた作業船を設置して貰う事を強力にお願いしておりました。

此の方法は最も実行し易く結構な方法と思います。これは云わば対症療法であり、根本的な治療にはなりません。ここではむしろ原因療法をやるべきです。其の原因療法とは密殖の緩和、即ち筏の規制であります。

三重県で現在の筏をこれ以上減らす事は不可能で、筏の規制は小業者の圧迫であるとすぐ取られます。そんな事をやるのでは業者の協力を得る事は困難であり実現は難しいと思います。

私は、この筏の規制について私の意見を申し述べて見たいと存じます。

(イ) 生産規制の問題

生産規制の実行出来る唯一の方法は筏の規制と思います。筏の規制には二つの異なつた意味があります。

(1) 品質向上の為に密殖緩和を図る筏規制

(2) 市価安定の為に共販の裏付けとして数量的な生産規制を行うもの

この内前者の品質向上を目的とするものが、特に三重県に於ては焦眉的であります。

そして其の次に将来の問題として、後者の市価安定の為に数量の生産規制を行うべきだと考えます。それは何故かと云うと、37年度の養殖作業員数量は3億と云われております。

前にも申し述べた通り、3億の作業をしたものとしてもこれは徒らに貝を殺し、脱核を増やして、海に捨てて了うので、浜揚げ数量は2万貫に達しないものと思います。2万貫の生産ならば2億の作業でも達成出来る数量です。此の事実はいくらこれ以上作業数量を増やしても金額的には減産となり、数量から見ても余り増産は出来ないと云う皮肉な結果になります。此の意味から云つて、こゝ当分は数量的な生産規制よりも、品質向上の目的の生産規制が必要と云う事が云えると思います。

先に生産規制のためには筏の規制が実行出来る唯一方法だと申し上げましたが、今でも「真珠養殖事業法を改正して、サイズ別生産数量を個人に割当てする」と云うが如き、机上のプランを云う人もありますが、これは実施不可能である事は申す迄もありません。

出来る方法としては筏の規制で、三重県の県条例の実施経験を通じて見

て、これが実施出来る唯一の方法と存じます。

筏規制の具体案として考えられるのは、漁業権免許の際に制限条件を付けて、「此の漁場では何台しか置けない」と云う事も一つの方法です。

本年2月の真珠審議会の専門委員会の席上で、水産庁当局から次回の漁業権切替の時には、制限、条件を付ける事を考えているとの発言がありました。漁業権は各県知事が免許する事になつているので、各県の事情を斟酌して総合的立場より水産庁が取纏める事になると思います。

この全国的な立場で調整するには今後、真珠養殖事業法を改正して漁業法を補う事が必要と存じます。

私は其の席上で、水産庁当局に対し次の様に要望して置きました。

表4 全国の真珠業者数並に
真珠生産数量(農林統計)

年 度	養 殖 業 者 数	生 産 数 量
昭和30年度	1,643名	6,542貫
31	1,734	7,098
32	2,574	8,015
33	3,001	12,822
34	3,080	13,682
35	3,484	16,108
36	3,637	19,460
37	3,670	※ 22,643

表5 三重県に於ける
年度別登録筏台数

年 度	筏 台 数
昭和32年度	89,176台
33	81,702
34	75,081
35	64,847
36	62,719
37	62,264

※ 全真連調べ

『三重県は県条例で筏の登録をやつているので、5ヶ年計画で9万台の筏を6万2千台に減らしている。これ以上減らす事は不可能と云う事で、これで一応止めている状態である。漁業権の免許の場合でも、一応現在の実績を認めて免許しなければ、筏の持つて行き場所が無く、直ちに小業者は困るので、例えば最低30坪に一台と云う所もあるが、これはこの儘許可するより方法は無いと思う。他県の場合も現在の実績を調査して、一応現状を認めて許可するより方法はないと思う。其の上で、密殖漁場の者に優先的に代換漁場を当てる様にして頂きたい』此の様に希望しておきました。

斯くして、初めて密殖緩和が達成出来て、品質向上の目的を達する事が出来ると思います。新規漁場を開拓する事は容易でない事は分つていますが、密殖の者を優先して、県同志が幹旋し合い、其の上で業者の組合が実

際には漁場のある組合と折衝すれば出来ない事はないと信じます。

この漁業権の制限条件を併せ行う場合は、従来の三重県の県条例だけよりも強力なものとなり、合理的なものになると存じます。

次に数量的な生産制限ですが、さきに申し上げた様に現在の漁場の状態では、1年に2万貫以上の生産は無理があると申し上げましたが、だんだん漁場の使用方法が変つて来て、相当の荒海でも使える様になつて来ると、まだまだ増産可能な事になるので、其の場合は海外の需要に応じた数量的な生産規制が必要になると思います。

其の場合は、先ず大業者が率先して範を示すべきだと思います。事業者協会を中心とした大業者の生産量は約全体の40%位あります。其の系例を含めると60%以上になります。これら業者の生産規制に対する動向によつて、其の方向が決定されます。

それから順次小業者に及ぼすべきだと思います。

最近大業者間では生産を縮小する人が相当あります。これは勿論、其の方が有利だからと考えるからであります。

将来世界の需要に見合う生産規制が必要となる場合は、先ず大業者が率先して其の処置をやるべきであり、又そうなるものと信じます。

最後に申し上げますが、他の産業界と比較して見ると、真珠程よい事業はないと思うのであります。

業者の個人個人が俺だけとは思っている人が多いのは、まだ真珠事業には余裕があるのかも分かりません。よく真珠業界はこうしなければ滅亡すると叫ぶ場合がありますが、これは声を大にして警告するのであつて、私は絶対につぶれる事は無いと思います。然しつぶれなくても、好んで苦しみ貧乏する事になると思います。ドイツの学生が真珠の調査に、先日全真連へ来て、こんな立派な恵まれた事業は無いが、こんなよい事業をしながら業者が貧乏しているのが不思議でならないと云つたそうですが、素人のドイツ人学生の観察であつても、大いに教訓を与えられるものがあります。

最近業界も若返り、時代が變つて来ました。戦後、私は幹部の中では若手だつたのですが、最近は何れも二代目となつて、私達が年配組になつて大変淋しい事ですが、研究会の皆様は大低此の方々だと思います。業者が二代目で若返つた時には、「俺だけは大丈夫」だと云う頑迷な利己主義が去る時にしたいと思います。全真連を中心にして業界全体を良くし、恵まれた真珠産業を若返らして頂きたいと、皆様に大いに期待する次第であります。「老兵は去るのみ」と云う言葉がありますが、私も少しでも業界の御役に立つ様、今後も微力を尽したいと存じます。大変独りよがりて、聞き苦しい点もあつたと存じますが、御静聴を感謝します。

+++++
 + 全 真 連 だ よ り +
 + + + + +

第 6 回 真 珠 技 術 研 究 会

第 6 回真珠技術研究会は去る 2 月 20 日伊勢市真珠会館で開催されました。
 当日は寒い日にもかかわらず 110 名 程の聴視者を得て盛会に開かれました。
 今回は国研の太田所長和田技官の研究の発表の他にアサヒ真珠社長西岡光夫
 氏や三重労働基準局長の高橋明氏の講演もありました。

以下今回の講師及びテー
 マは次のとおりでした。

1. 真珠の色沢に及ぼす
 諸因子について

真研 和田浩爾氏

2. あこや貝の病害対策
 について

真研 太田 繁氏

3. 昭和35年36年度の矢
 湾及び鳥羽湾に於け
 る異常斃死について

養蠶研究所

佐藤忠勇氏

4. 最近の真珠業界の動向とその対策

西 岡 光 夫 氏

5. 真珠用 X線装置の取扱について

三重労働基準局長 高 橋 明 氏



太 田 所 長 の 講 演 風 景

出 席 者 名 簿

県庁水産課	杉谷 正昭	竹田 豊		
真珠研究所	太田 繁	和田 浩爾	町井 昭	植本 東彦
水産試験場	柴原 規計	山口 昇		

三重県立大 辻井 禎
 水産高校 藤田 正
 片田中学校 伊東国夫
 母貝組合 北村幸臣
 堀口真珠 茶木和夫
 三重県真珠 脇 専一
 共栄水産 山口菊男
 山本一彦
 大須賀正二



佐藤氏の講演風景

伊勢市	山下信一郎			
磯部町の矢	堀口 繁雄			
阿児町神明	北尾 樟一	太田 駒敏	奥山 邦雄	溝口常太郎
〃 賢島	中北 宣夫			
〃 立神	山勝真珠2名	浜井 幸男		
大王町船越	高橋 努			
〃 波切	中村 正一	喜田孫八郎	中山 一儀	山際 啓一
志摩町片田	林 一雄	小川 一二	谷奥 恒二	
〃 和具	平賀 清隆	平賀 修		
〃 越賀	蔭間喜代次			
志摩町越賀	井上 啓隆	井上 太市	仁科 博彦	鵜丹谷彌生
浜島町	西村 耕一	井上物産3名	松井十四雄	
〃 多徳	大西 啓司	竹内 信義	山崎 和夫	
南勢町五ヶ所	御木本真珠会2名			
〃 下津浦	幸田 隆	北村 庄助	山本 五郎	梅田 喜一
〃 神原	橋川 勝司	青山 重久	山本 猷一	南 徹
〃 相賀	大谷 俊裕			
〃 宿浦	中村 正弘	中村 紘勇	弓場 博	向城 良彦
	中村 勉			
	畑 弘次	竹内 富郎	村田 忠一	村田 忠也
	田中喜美郎			
	川口 欣三	加藤莊次郎	高松嘉四郎	山本長兵衛
	川口 浩平	山本 国也	平賀 一栄	

南島町阿曾浦 山下駒太郎 木村 隆之 下村 明正 山川 陽
 島田 三郎 里中 守 山川 禎己 山川修佑造
 岸 信生
 ♪ 神前浦 浜地 芳雄 浜地 民雄
 ♪ 贅浦 中道 高司
 四 日 市 平田オレフィンKK
 愛媛県真珠漁協 田中 一夫

第 7 回 真 珠 技 術 研 究 会

真珠養殖場では新年度を迎え核入作業に多忙な矢先、第7回真珠技術研究会は、去る5月8日伊勢市真珠会館にて開催されました。当日は真珠の最盛期にもかかわらず60名以上の人々の参集を見、各講師の人々から終始熱心な研究発表が行われました。又研究発表の後1時間にわたり最近非常に問題になっている真珠貝の貝殻寄生虫又は体内寄生虫の件について討論会が行われ、各業者より実際の状況の説明あるいは質問があり、非常な盛会のうちに午後4時閉会致しました。

当日の主な研究発表、講師ならびに出席者は次の如くでした。

(1) 高水温と異常斃死について

水産試験場 木 村 三 郎

浜島水試の観測結果より、6、7月の降水量が多いと水温が低く、少ないと高水温が現われる事が多く、その間に相関関係のある事を発表されました。

(2) 密殖漁場の巻について

挿核比較試験結果について

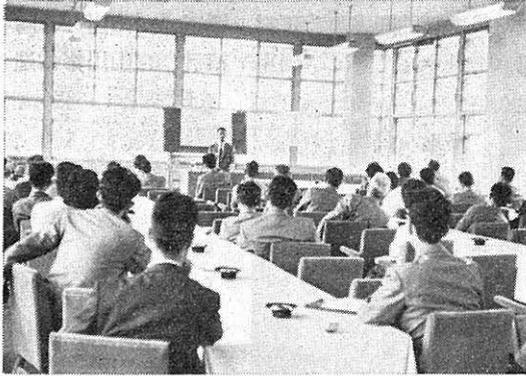
水産試験場 関 政 夫

アゴ湾立神浦に於ける試験で、密殖漁場内での粗殖区域と密殖区域に於ける珠の巻の比較試験結果の発表であり、この報告では明らかな密殖漁場でもその筏を少なくする事により珠の成績が良くなると発表された。

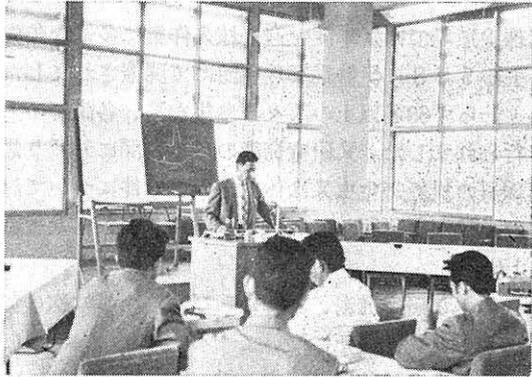
(3) 漁場の利用形態とその価値について

水産試験場 山 口 昇

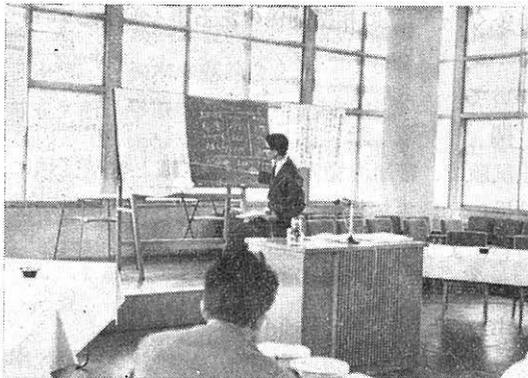
三重県内の各漁場に於ける漁場別の浜揚珠の価格の比較並びに斃死率等の研究発表で、各漁場別の差が明らかになっていた。



木村三郎氏の講演風景



関政夫氏の講演風景



山口昇氏の講演風景

(4) 真珠貝の色彩光環境調整について

南勢町船越 尾田方七

氏が長年研究されて来た研究の報告で、カクテルライトを使用して夜間照明により珠の巻の促進並びに貝の夜行性をおさえ、脱核を防止する試験で発表によれば明らかに効果のある事が示された。



日時 38年5月8日

(10:00~16:00)

尾田方七氏の講演風景

場所 伊勢市 真珠会館

主な出席者

国立真珠研究所	太田所長	沢田	松永
三重県立大	辻井		
水産試験場	野本場長		
阿児町鵜方	加藤真珠2名		
〃 賢島	亀井(山勝真珠)	須古(極東真珠)	
〃 立神	みつわ真珠1名		
大王町船越	山本(敏)	山際(定)	
〃 波切	木村(楠)		
志摩町布施田	南		
〃 和具	岩城(平)		
浜島町	真珠玉組合1名	御木本真珠1名	
南勢町五ヶ所	幸田	城者	奥村
〃 下津浦	大谷	中村(孝)	向城 尾上 中村(勉)
南勢町	西村		
〃 相賀	村田	田中	竹内
〃 礮	中村(忠)		
南島町阿曾浦	みつわ真珠3名	山川(陽)	山川(禎) 里中
〃 神前浦	浜地(喬)	浜地(正)	

海山町	矢口	みつわ真珠3名	植村
長島町		筒井他1名	
伊勢市		山下	山口(母貝組合)
大阪市		小島	(日本レシチン)
愛媛県		田中	(愛媛県組合)
全真連		平賀	久米村 番匠

討 論 会 要 旨

司会 ; 真珠の品質向上が言われている折から、寄生虫の被害が非常に多くなつて来ており、時には購入母貝の50%が寄生虫に犯されて施術が出来なかつたとか、あるいはこれらの貝に施術しても珠の巻が悪かつたり、クズ珠が多いとか色々問題があると思いますのでこれらの問題について国立真珠研究所、三重県水産試験場、三重大の各先生等と一緒に皆さんで討論していきたいと思います。

太田国研所長 ; 真珠貝の寄生虫は、貝殻に寄生するものと体内に寄生するセルカリアの二種類があるが、後者は各漁場に多くても10~15%位の寄生であるが、貝殻に寄生するものは非常に多いので施術の時症状のひどいものは使用しない様に注意して欲しい。又セルカリアの多く寄生している漁場は限られている様である現在国研では次の様な事柄について研究中であるので協力して欲しい。

(1) 寄生虫のいる貝に施術した場合の珠の成績

(2) 貝に寄生虫の進入するのを防ぐためセルカリアの生活史を調査

(K) : 五ヶ所地区では河口部の漁場及び泥深い漁場にセルカリアが多く寄生している様である。

太田 ; 何月頃最も多く繁殖するか

(K) ; 夏場に最も多い様であるがはつきり解らない。

太田 ; 時期的には春から夏にかけて寄生しているが、水温の高くなる8月頃最も活動する様である。又貝は6~7月は元気な様に見えるが、8月以後になると急速に衰弱する。又セルカリアは夏から秋に活動し貝殻より脱出して行く。

(K) ; 寄生虫の貝は病気の治つた後使用しても良いか。

太田 ; 一旦病気になると回復は不可能と言つても良い、現状では病気の貝は捨てた方が良いと思う。

(M) ; 貝から出たセルカリアの寄生先はどんな経路をたどるか。

太田 貝殻を脱出したセルカリアは魚に寄生する事はまず間違いない。その後の寄生先は全く解らない、鳥か魚か調査中である。又セルカリアの寄生する漁場は湾奥の漁場、河口の漁場、泥の深い漁場等である。

(Y) ; セルカリアの多く発生している漁場とPHについての関係はないか。

太田 ; それらの漁場とPHの間には余り関係はないと思う。

(O) ; どの程度の貝よりセルカリアは寄生しているのか。

太田 ; 稚貝に寄生していると思うが現在我々が調査している範囲では2年貝位から目につく様である。

セルカリアは貝から貝へは絶対に寄生しない。とにかく特定の漁場にだけ発生し温度が高くなると泳ぎ出し魚に寄生する。しかし発生は爆発的ではない。

(M) ; 外洋性の漁場へ持つて行つた場合セルカリアが少なくなる様である。私の場合施術前の貝には多く寄生していたが、外洋性の漁場へ移動してからには少なくなった。外洋性の漁場では発生しないのではないか。

太田 ; 外洋性の漁場に移植した後寄生した貝が少なくなると言うのは、その後繁殖が低下し新たに寄生する事がないためと思う。とにかく少しづつでも皆様で研究実験して戴きそれらの結果を発表して欲しい。私共はそれらを取捨選択してもう一回たしかめ研究の足がかりにしたい。この問題は非常に重大な事で、ある業者の如きは購入母貝の50%はセルカリアのために使用出来なかつたと言っている程である。

(K) ; セルカリアの寄生した貝のピースは使用しても巻が薄く珠も黒い物が多い様である。

(O) ; 外套膜に白い斑点のある貝はピースとして使用出来ないのか、又あれは如何なるものか。

辻井三重大教授 ; 業者は「カビク」と呼んでいる様であるが調査研究しているが現状では解らない。

太田 ; セルカリアは貝の中で成熟してそれから貝から脱出して魚に寄生する。その後の経路を調べるため現在サギ、カモメ、ウ等の糞を調べている。もしこれらの鳥をとらえる機会があつたら資料として提供して欲しい。

(M) ; 漁場の老化現象が生じた場合肥料を散布するとかして漁場の更新は出来ないものか。

関技師(水試) ; 海水は絶えず動いているため肥料を散布するとしても大量に施こさねば効果はうすい。かえつて餌料を与える事を考えた方が良い

のではないか。しかし普通の漁場では考える必要はないと思う。

太田 ; 漁場の老化とは、我々は密殖している漁場で珠の成績が悪くなった場合、筏を少なくとも珠の成績の良くならない様な漁場の場合老化した漁場と呼んでいる。単なる密殖の場合は筏を少なくすると珠の成績は良くなってくる。

(H) ; 最近売出されているパールチンの成績は如何。

(M) ; 私の漁場では悪くはないが未だはつきりした結果は出ていない。

太田 ; 国研で研究した結果では、第1年度は良かったが第2年度は悪かった。現在第3回目の実験を行つている。

業者の間でも良悪両方の意見がある様である。

(M) ; とにかく非常に成績の悪い漁場、あるいは貝が悪い場合は効果がある様に思う。

(Y) ; 私の所では可もなし不可もなしと言う所。第1年目は良かったが2年目は悪かった。

辻井 ; 薬品を使用する場合貝の状態により薬品が作用したり作用しなかつたりする。

(Y) ; パールチンの効果は使用する時期により異なる。時期的な問題を解決して欲しい。又現在の物は使いにくい。もう少し使い易くして欲しい。

(M) ; 鳥羽の漁場は最近貝の死亡が多くなつたり珠の成績が悪くなつて来ている。これらは工場廃液のためではないか。

木村技師(水試) ; 鳥羽近辺の漁場の悪化について工場廃液等の問題を言う人もあるが現状では資料が全くない。それよりも漁場環境の急変の影響が大きいと思う。高水温あるいは大雨による低比重等の関係からと思う。とにかく鳥羽は干潮時には2~3時間海水比重が非常に小さくなる所である。又貝がぼつぼつ死亡するのは貝の個体差によるものと思う。

司会 ; 本日は御多忙な時期に有意義な討論、誠に有難うございました。

これで本日の研究会を終了させていただきます。

全国真珠養殖漁業協同組合連合会

会員並びに役員（昭和38年度）

本 部 東京都中央区京橋3の7
(日本真珠会館)

支 部 伊勢市岩淵町84の2
(真 珠 会 館)

会 員

会 員 名 長崎県真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 長崎県大村市西本町537
組 合 長 西 村 金 造

会 員 名 和歌山県真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 和歌山県西牟婁郡白浜町堅田
組 合 長 堅 田 輝 昭

会 員 名 愛媛県真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 愛媛県宇和島市向新町19
組 合 長 大 月 成 男

会 員 名 佐賀県真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 佐賀県唐津市西寺町488の6
組 合 長 吉 田 寛 司

会 員 名 布施田真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県志摩郡志摩町布施田
組 合 長 南 平 左 衛 門

会 員 名 越賀真珠漁業協同組合
所 在 地 三重県志摩郡志摩町越賀
組 合 長 鷗 丹 谷 彌 十 郎

会 員 名	船越真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県志摩郡大王町船越
組 合 長	山 際 定 衛 門
会 員 名	鹿児島県真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	鹿児島県鹿児島市堀江町24
組 合 長	黒 木 貞 雄
会 員 名	紀州真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県北牟婁郡海山町矢口浦915
組 合 長	奥 村 清 一
会 員 名	間崎真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県志摩郡志摩町和具
組 合 長	岩 城 常 三
会 員 名	神明真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県志摩郡阿児町神明
組 合 長	松 尾 圭 起
会 員 名	南海真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県度会郡南勢町迫間浦
組 合 長	中 村 忠 臣
会 員 名	片田真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県志摩郡志摩町片田
組 合 長	浜 口 文 吉
会 員 名	鵜方真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県志摩郡阿児町鵜方
組 合 長	西 崎 貞 三 郎
会 員 名	南島真珠養殖漁業協同組合
所 在 地	三重県度会郡南島町阿曾浦
組 合 長	岸 栄 松

- | | |
|-------|------------------|
| 会 員 名 | 的矢湾真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡磯部町三ヶ所 |
| 組 合 長 | 北 健 治 |
| 会 員 名 | 三重県浜島町真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡浜島町浜島 |
| 組 合 長 | 大 西 楠 治 郎 |
| 会 員 名 | 南志摩真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡大王町船越 |
| 組 合 長 | 北 村 英 一 |
| 会 員 名 | 立神真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡阿児町立神 |
| 組 合 長 | 中 井 宗 五 郎 |
| 会 員 名 | 和具真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡志摩町和具 |
| 組 合 長 | 田 辺 耕 治 |
| 会 員 名 | 御座真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡志摩町御座 |
| 組 合 長 | 山 本 世 樹 |
| 会 員 名 | 五ヶ所真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県度会郡南勢町五ヶ所浦 |
| 組 合 長 | 西 井 善 四 郎 |
| 会 員 名 | 対馬真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 長崎県下県郡厳原町大字田淵 |
| 組 合 長 | 齊 藤 滋 夫 |
| 会 員 名 | 的矢地区真珠養殖漁業協同組合 |
| 所 在 地 | 三重県志摩郡磯部町の矢 |
| 組 合 長 | 佐 藤 忠 揚 |

会 員 名 鳥羽真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県鳥羽市鳥羽町（商工会館内）
組 合 長 野 上 茂 男

会 員 名 御浜真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県志摩郡阿児町鷓方
組 合 長 北 村 満 津 郎

会 員 名 鷓方相生真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県志摩郡阿児町鷓方
組 合 長 渡 辺 賢 次 郎

会 員 名 宿浦真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県度会郡南勢町宿浦
組 合 長 川 口 欣 三

会 員 名 波切真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県志摩郡大王町波切（魚市場事務所内）
組 合 長 林 一 雄

会 員 名 全南島町真珠養殖漁業協同組合
所 在 地 三重県度会郡南島町神前浦
組 合 長 大 野 一 美

役員、顧問及び相談役

会 長 御 木 本 美 隆
住 所 東京都港区麻布宮村町42
所 属 組 合 三重県浜島町真珠養殖漁業協同組合

副 会 長 松 尾 圭 起
住 所 三重県志摩郡阿児町神明755
所 属 組 合 神明真珠養殖漁業協同組合

専務理事 高 橋 泰 彦
住 所 東京都新宿区百人町4の450 戸山アパート内

専務理事 浜 本 忠 史
住 所 三重県伊勢市本町110 小林方

常務理事 井 上 巖
住 所 三重県伊勢市岩淵町500

常務理事 山 本 勝
住 所 神戸市生田区山本通2の77

常務理事 堅 田 輝 昭
住 所 和歌山県西牟婁郡白浜町堅田1,470
所 属 組 合 和歌山県真珠養殖漁業協同組合

常務理事 大 月 成 男
住 所 愛媛県宇和島市中町24の1
所 属 組 合 愛媛県真珠養殖漁業協同組合

常務理事 吉 田 寛 司
住 所 佐賀県東松浦郡玄海町今村5,188
所 属 組 合 佐賀県真珠養殖漁業協同組合

常務理事 南 平 左 衛 門
住 所 三重県伊勢市宮後町
所 属 組 合 布施田真珠養殖漁業協同組合

常務理事 鵜 丹 谷 彌 十 郎
住 所 三重県志摩郡志摩町越賀764
所 属 組 合 越賀真珠漁業協同組合

常務理事 中 村 正 一
住 所 三重県志摩郡大王町船越1,074
所 属 組 合 船越真珠養殖漁業協同組合

常務理事 住 所	荻 原 孝 之 三重県伊勢市吹上町274
理 事 住 所 所 属 組 合	西 村 金 造 長崎県西彼杵郡亀岳村亀浦郷1, 070 長崎県真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	黒 木 貞 雄 鹿児島県肝付郡佐多町伊座敷3, 921 鹿児島県真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	奥 村 清 一 三重県北牟婁郡海山町大字引本浦 紀州真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	岩 城 常 三 三重県志摩郡志摩町和具4, 239 間崎真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	大 井 田 正 経 三重県志摩郡阿児町神明74の1 神明真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	中 村 忠 臣 三重県度会郡南勢町字礫 南海真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	浜 口 文 吉 三重県志摩郡志摩町片田2, 752 片田真珠養殖漁業協同組合
理 事 住 所 所 属 組 合	西 崎 貞 三 郎 三重県志摩郡阿児町鵜方 鵜方真珠養殖漁業協同組合

理事 岸 栄 松
住所 三重県度会郡南島町阿曾浦197の8
所属組合 南島真珠養殖漁業協同組合

理事 北 健 治
住所 三重県志摩郡磯部町三ヶ所466
所属組合 的矢湾真珠養殖漁業協同組合

理事 大 西 楠 治 郎
住所 三重県志摩郡浜島町浜島
所属組合 三重県浜島町真珠養殖漁業協同組合

理事 北 村 英 一
住所 三重県志摩郡大王町船越809
所属組合 南志摩真珠養殖漁業協同組合

理事 中 井 宗 五 郎
住所 三重県志摩郡阿児町立神2, 630
所属組合 立神真珠養殖漁業協同組合

理事 田 辺 耕 治
住所 三重県志摩郡志摩町和具1, 933の7
所属組合 和具真珠養殖漁業協同組合

理事 山 本 世 樹
住所 三重県志摩郡志摩町御座225
所属組合 御座真珠養殖漁業協同組合

理事 西 井 善 四 郎
住所 三重県度会郡南勢町五ヶ所浦1, 031の1
所属組合 五ヶ所真珠養殖漁業協同組合

理事 齊 藤 滋 夫
住所 長崎県下県郡美津島町濃部199
所属組合 対馬真珠養殖漁業協同組合

理 事	佐 藤 忠 揚
住 所	三重県志摩郡磯部町の矢
所 属 組 合	の矢地区真珠養殖漁業協同組合
理 事	野 上 茂 男
住 所	三重県伊勢市常磐町270
所 属 組 合	鳥羽真珠養殖漁業協同組合
理 事	北 村 満 津 郎
住 所	三重県志摩郡阿児町鷓方942の1
所 属 組 合	御浜真珠養殖漁業協同組合
理 事	渡 辺 賢 次 郎
住 所	三重県志摩郡阿児町鷓方
所 属 組 合	鷓方相生真珠養殖漁業協同組合
理 事	川 口 欣 三
住 所	三重県度会郡南勢町宿浦
所 属 組 合	宿浦真珠養殖漁業協同組合
理 事	林 一 雄
住 所	三重県志摩郡大王町波切
所 属 組 合	波切真珠養殖漁業協同組合
理 事	大 野 一 美
住 所	三重県度会郡南島町賛浦
所 属 組 合	全南島町真珠養殖漁業協同組合
監 事	田 崎 甚 作
住 所	長崎県大村市壹ノ郷132
監 事	幸 田 隆
住 所	三重県度会郡南勢町五ヶ所浦841の1

監 事 西 岡 健 一
住 所 三重県志摩郡志摩町布施田277の1

監 事 森 正 男
住 所 神戸市生田区加納町4丁目1の128

顧 問 大 月 菊 男
住 所 神戸市葺合区二宮町1の4

相 談 役 高 島 吉 郎
住 所 東京都港区芝公園五号地12

相 談 役 横 田 稔
住 所 神戸市灘区篠原北町2の12

相 談 役 山 本 清 松
住 所 京都市左京区下鴨塚本町40の1

相 談 役 北 村 勤
住 所 神戸市生田区山本通3の1の2

相 談 役 村 田 は ま 彥
住 所 神戸市生田区山本通4の97

相 談 役 三 輪 邦 彦
住 所 東京都文京区湯島天神町3の38

相 談 役 西 岡 光 夫
住 所 三重県伊勢市吹上町456

業 界 ニ ュ ー ス

わからぬ価格構成

大ざっぱにみて原価は小売値の半分

朝 日 新 聞 (昭和38年3月27日)

真珠の養殖組合や加工業者を訪ねて真珠の価格構成をたずねたら「それがわかるのだつたら、こちらから聞きたいほどです」といわれた。真珠の養殖業は文字通りの水商売で、一定の投資に対してどれだけの収益があがるのか、全く予想はつかない。同じ経費のかかつた母貝が1粒10万円以上位から、10円未満まで千差万別の真珠を生み出す。それに流通段階での値動きが激しく、とても価格構成はわからないという。

真珠の関係業者は養殖と加工と輸出の3つだが、大手業者はこの3つを兼ねているものが多く、その取扱い量は全生産量の60%に達している。また小売の大部分もこの加工、輸出業者が兼営しており、小売だけの業者はごく少ない。養殖業者と加工、輸出業者の取引はおもに入札によつてはいるが、直接取引もあれば中間業者が仲介する場合もあり、さらには連屋(れんや)というネットワーク、の半加工業者の手を通つたり、この連屋が外国の輸入業者と取引することもあつてメーカー、問屋、小売などとはつきりした色分けはできない。入札は加工輸出業者同士の間でも行われており、全国各地の入札値と最大の市場であるアメリカの需要がからみ合つて、取引値段は絶えず動いている。

直径6ミリ程度のものなら大体1貫目(3.75キログラム)で洗面器1ばい分だが、これが平均して60万円ないし100万円で養殖業者から加工、輸出業者に売られる。しかしこれが全部使えるわけではなく、少なくとも1割はクズ玉だ。取引の際、見本がサラに盛られているが、このうち何割が使いものになるかを見極めるのが、もうけの分れ道になる。ある業者は「うちでは精選するので、本当に使えるのは収穫した300個につき1個ぐらい」ともいつている。業者のいい分はともかく、三重県の36年度の統計から割出すと、同県の英虞(あご)湾地区の業者の養殖真珠の原価は、直径7～8ミリのもので1粒当たり平均約190

円となつている。しかしこの原価も、年によつて20%位上下動するのは普通のこと。このため養殖業者は共販制度などで売価の維持を図っているが原価の動きが激しいのでうまくいかないようだ。

では一体どうして小売価格が決めるのだろうか。やはり算定のもとには原価計算で、業者はこれに長年の経験とその時の需要をにらみ合わせてはじき出すのだが、これはあくまでも業者の主観的な評価で、ある小売業者は、大ざつぱに見て原価は小売値の半分ぐらい、と推測してくれたが「真珠は値段があつてないようなもの」ともいつていた。

みごと真珠の浅海養殖に成功

三重県南勢町の青年グループ

サンケイ新聞 (昭和38年2月5日)

南勢町神原地区は、志摩半島に深く切れこんだ五ヶ所湾のなかでも、最奥部の小湾ぞいにある。戸数204戸のうち半分の110戸が漁業を営み、残りは半農半漁の小さな村。終戦後二・三年は黒ダイ、ボラ、スズキなどの魚族も豊富で生計をたてるのにじゆうぶんだつた。しかし乱獲と、台風などの影響で25年ごろには漁獲は激減、漁民は新しい収入源をみつけなければならなくなつた。

ちょうどこのころから真珠ブーム。漁民はいつせいにこの方にとびつき、一本づりからぞくぞくと転向した。

最初にはアコヤ母貝を育て、真珠業者に売り渡していた。だが、そのうち自分たちが真珠をつくる方が利益が多い……と、真珠養殖に手をつけるものがふえ、神原漁業協同組合(向城勇組合長)でも漁業権の一部を組合員に開放、1戸にイカダ1台ずつ、計110台の真珠養殖を認めることにした。漁民の真珠養殖が湾内の沿岸一帯に流行した。50平方キロたらずのせまい同湾内には既存の養殖業者を含め、1万5,6千台のイカダがひしめきあう結果となつてしまつたのである。

イカダが多くなると潮の流れがさまたげられ、アコヤ貝のエサとなるプランクトンが少なくなるのは当然のことだ。真珠の成長がわるくなり、いままで1年でりつぱな商品となつたものが、1年半から2年も養殖しなければならなくなつてきた。純益も極度にわるくなり「いつそ陸にあがつて農業に専念しようか」と暗い表情でつぶやく人たちがふえてきた。

このときたちあがつたのが、青年たちだつた。「これからの漁業は天然資源だけをあてにしてはダメだ」と、同漁協組内に青年部=中村正弘部長(24)=を

つくり、35年から女子も参加して部員=27人でスタート研究にとりかかった。

同地区の養殖イカダ数は、母貝が800台、真珠イカダが個人と組合直営合わせて350台の計1150台。これ以上ふやせば漁業権争いで血の雨もふりかねない。

青年たちはいままでとうてい養殖はできないとされていた湾奥部の浅海や、母貝と作業員（核入れした真珠貝）の共存など新機軸の研究に目をつけた。海が浅ければ潮の流れがわるく、プランクトンは不足し、また水温の上昇、下降の比率が高いので貝は育たない。母貝と作業員を共存させることは自然密殖になり、プランクトンが不足するので、いずれも不可能というのが業界の常識だった。

青年部の中の養殖研究部=坂中利枝部長(22)=が中心となつて母貝イカダ4台と真珠養殖イカダ1台をうかべて研究にとりかかった。母貝の養殖には、1台のイカダに何千個の稚貝をぶら下げれば一番成育がよく、しかも投下資本に対する利益率がよいかなどを研究、さらに真珠の養殖にはどのくらいの深度、水温、ひとつのイカダあたり何千個くらいの作業員をぶらさげれば成育や利益がよいかなど、あらゆる面からくわしく調査を進めた。

これまで真珠の養殖はカンにたよりがちで、科学的な資料がとぼしいことがガンとされていた。青年たちはこれを科学的に研究し真珠の核入れのときに、薬品を使用すれば、非常な効果があることをつきとめると、すぐヨードチンキなどあらゆるクスリを試みた。このほか、核入れにあたっては、少しずつ日時をずらして行なうなど細かい配慮をして研究をつづけた。

こうして昨年正月、待望の真珠の初浜揚げを行なつた。海からとり出したアコヤ貝の口に小刀をあてがい、おそろおそろ開いてみた青年たちの前にみごとなピンク、ブルーの真珠がころがり出た。『成功した』……。『やつた、やつた』……。やせた海からみごとな真珠をとり出した青年たちはおどりがつて喜んだ。こうして直径五〜六ミリの中玉真珠1.5キロを浜揚げし、真珠業者に7万円で売つた。クズ玉も多かつたので値段はさしてよくなかつたが、深さ7メートル内外の浅海や母貝と作業員を同居させるという悪条件のもとで、これだけの成果をあげたことは大成功だった。そしてことしは、さる1月23日から浜揚げにとりかかったが、真珠の質は昨年にくらべてうんとよくなり、青年たちは成功への自信をよりいつそう深めた。

三重県には志摩郡賢島に国立真珠研究所があり、また御木本真珠など大手養殖業者の中には独自の養殖研究を行なっているものもある。しかし、青年が共同研究しているケースは全国でもまれなこと。またその技術的水準はトツブク

ラスといわれ、水産庁でもこの研究に注目して、年に2・3回係り員がわざわざ出張してきて青年会の研究データーを調べている。県でも昨年の春、職業教育センターに指定、20万円の補助を出した。

若い人たちの研究が認められたわけである。青年たちは、これを資金として顕微鏡二基、水温計、水色計、イオン濃度計、自記水温計、アクアリウム（自動海水循環装置）などの研究器具を買い入れ、科学的研究に新威力を加えている。

青年たちが属している神原漁業協同組合の向城組合長は「条件のよいところで成功させることはだれでもできるが、悪条件のもとで養殖研究するところに青年たちの意気どみと価値がある。地区のパイオニアといつたところで、高く評価している」とほめている。

三重県に真珠課設けよ

全真連 真珠養殖の振興策を要望

中部日本新聞 （昭和38年2月27日）

全国真珠養殖漁協組連合会（御木本美隆会長）は26日、田中知事に「県に真珠課を設け真珠養殖の振興策を図れ」など四項目の要望書を出した。

年間約80億円の水揚げをしているが、最近の漁場の老朽化、それに伴う品質の悪化、不均衡サイズによる値下がりなどで経営は困難になつているという。要望書の内容つぎのとおり。

- ① 真珠審議会の会議招集回数をふやし問題の早期解決を図る。またその構成員を再検討する。
- ② 英虞、五ヶ所、的矢などの湾奥部の漁場老朽化はとくにひどく、夏の高水温時、秋の硫化水素発生による異常死の原因となる。沿岸漁業構造改善事業として耕運、しゅんせつを定期的を実施してほしい。
- ③ 密殖を緩め品質向上を図るため密殖地区の零細業者のイカダを県外の新規仕上げ漁場に集団転出できるよう水産庁と連絡、あつせんに努力してほしい。
- ④ これらの施策を強力に推進するため、県に真珠課を新設してキメの細かい指導に乗り出すべきだ。

県主要産業への発展祝つて

真珠養殖条例五周年記念大会開く

中部日本新聞 (昭和38年2月14日)

県、全真連、県真珠貝養殖漁協組主催の真珠養殖事業条例公布5周年記念大会は、県下の真珠関係者約200人を集めて13日午後1時30分から伊勢市岩淵町の真珠会館で開かれた。開会冒頭、田中知事が主催者側を代表して「密殖と計画生産による養殖事業の安定を目的としたこの条例ができてから5年の間に、真珠と真珠貝の年間生産高は110億円に達し三重県の主要産業となつた。今後も条例の精神を生かしてさらに事業の発展をはかりたい」とあいさつ。そのあと、水産庁長官代理、国会議員代表らの祝辞につづいて元全国真珠養殖漁協組合長堀口初三郎氏ら4人の業界功労者の表彰、さる8日と12日に行なわれた真珠貝、真珠の品評会の入賞者の表彰などがあり、日本真珠事業者協会長山本勝氏の記念講演「真珠業界に望む」をきいて午後4時ごろ大会の幕を閉じた。

なお8日志摩郡浜島町の県水試で開かれた真珠貝品評会の結果はつぎのように発表された

〔37.5g(10匁)以上の部〕

- 特 選=九鬼漁協組=水産庁長官賞
- 準特選=矢口浦漁協組
- 入 選=神原漁協組

〔30g(8匁)の部〕

- 特 選=九鬼浦共同真珠貝養殖組合
- 準特選=南勢町船越漁協組
- 入 選=奈屋浦漁協組

〔22.5g(6匁)の部〕

- 特 選=九鬼漁協組
- 準特選=浜島漁協組
- 入 選=古和浦漁協組

優秀な“英虞湾生まれ”

業者の7割が三重に本據

毎日新聞 (昭和37年12月28日)

伊勢市岩淵町の全国真珠会館で12月16日まで3日間ことし最後の真珠市が開

かれた。集まつた外人バイヤーは600人3日間の売り上げは3億8千万円入札会はじまつて以来の出来高で真珠養殖業者の表情は明るかつた。「ことしは台風や赤潮の被害が少なかつたのが明るい相場の一つの理由だ。全真連（全国真珠養殖漁業組合連合会）としては来春までに30億円の売り上げをめざしているが、このぶんでは30億円は堅いだらう」と全真連指導部長、平賀太寿雄氏(49)の表情もゆるむ。2年後の東京オリンピックに集まる外人観光客の需要も、養殖業者にとってはまたとないチャンスでもある。

現在、真珠養殖をしているところは広島、長崎など19県。業者は全国で3,300余人、その70%強(2,400人余)は三重県に本據を持つ。生産量では全体の70%養殖イカタ数でも50%は三重県が占める。`真珠王国`といわれるわけがこれではつきりする。三重県の業者の60%は英虞湾で養殖しており、五ヶ所湾、的矢湾の業者数を大きく引きはなしている。その英虞湾が10年前、大手筋の業者から見放されたことがある。ここでは業者も多く、乱造されるので、質のよい真珠がつくれないというのである。そこで瀬戸内海に新しい養殖場を求めて移る例が多かつた。その人たちが「外へ出てはじめて英虞湾が`地力`の強い湾だとわかつた」と見なおしてきた。瀬戸内海に新しい養殖場をみつけた人は、真珠界の長老、小林万作氏(78)＝三重県志摩郡阿児町神明＝だが、その小林氏も「瀬戸内海のよさは5年ともつまい」と予言していた。それがピタリとあたり逆に英虞湾がいつそう光つてきた。

英虞湾の`地力`とはなんだろう。小林氏はこう語る。「日本の海で、三年以上優秀な玉(真珠)を出したところはない。瀬戸内海の小豆島は2、3年前はよかつたが、ことしから悪くなりはじめた。ところが英虞湾は天然真珠をふくめて2千年来よい玉をつくつてくれている。英虞湾の地力とはこのことなのだ」

賢島の国立真珠研究所(太田繁所長)の研究課長、沢田保夫氏(36)は「真珠養殖は経験が先に進んで研究があとから追いかけている状態なので結論は出せないが……」と地力をつぎのように分析した。

英虞湾の海水を、ほかの湾の海水と比べながら実験すると、生産力が高いと考えなければつじつまがあわない。たとえば、真珠貝のエサになる百ミクロン(1/100ミリ)以下のプランクトンを調べるため海水をこす。そのとき、ほかの漁場の海水は1ℓをこすのに2～3時間ですむのに、英虞湾の海水だけは徹夜してもこせない、研究陣は頭をひねる。また英虞湾内の潮の流れはゆるやかで、平均1秒間に5cm前後、養殖によい条件だ。水温は成長によい19度前後の日が多い。地形をみても英虞湾ほど入江が多く、しかも急に深くなっている海岸(リアス式)はほかになく、少ない労働力で多くの仕事ができるし、波が静かでイ

カダを浮かべやすい。こうしたことが総合地力の正体らしい。

小林氏は「その地力が業者側のむずかしい問題で充分に生かされないのが残念だ」という。

国や地方自治体は、真珠の質を高めるため養殖場330㎡につきイカダ1台の割りで浮かべるべきだとして、業者を指導している。一方、業者にしてみれば水揚げ高をふやしたいのが人情。その結果、イカダ1台につき3000～4000の真珠貝をつるすところを、1万個近くの貝をつるしてしまう。これが問題の「密殖」だ。限られた田にたくさんイネを植えるようなもの。玉はできるが、真珠層の厚みが薄く、すぐれた真珠はできない。密殖は、国立真珠研究所の研究でも、よくないことが実証されており、業者もそれをよく知っているのだが…。この問題について和具真珠組合のある役員は業者の悩みをこう訴える。

「イカダ数をへらしたり密殖をさけることは基本的に賛成だ。しかし、それを実行して水揚げを半分へらし、その分だけ品質をよくしたとしても、仲買人が品質どおりに買ってくれるかどうか……いままでのように買ったか売れたら、銀行の借金さえ返せなくなる」

一時、真珠は「宝石か」「雑貨か」の論争があつた。金ぐりのため、やむをえず量産して出したものに「雑貨」のレッテルがはられたのだ。アサヒ真珠社長、西岡光夫氏(56)は、真珠を「雑貨」と呼ばせないために「どれだけ生産するかをワクをつくり、またサイズ別(真珠の大小)に、どれだけ生産するかを業者と組合が話し合うことだ。こうして生産に計画性をもたせたい」と呼びかけている。

密殖業者の取り締まりを要望

良質真珠の生産へ業界の体質改善案ねる

中部日本新聞 (昭和38年3月28日)

全真連三重支部＝伊勢市岩淵町＝では真珠業界の体質改善について養殖真珠の数量規制にとまなう品質の向上を強くよびかけているが、本年度の真珠イカダ6万台(3万台減)75,000Kgをピークに密殖、無登録業者の取り締まりを関係当局に要望、業界内部でも良質真珠の生産に重点をおき、価格の上伸策を検討することになった。

生産面で見ると昨年度で数量調整ができ、総輸出額は37年度150億を記録、真珠価格の強調が業界の再編成を刺激、前年にくらべ価格では16%の伸びをみせ

た。しかもこれまでは輸出が90%と海外からの引き合いをたよりにしていたが、日本経済の高度成長から昨年ごろから国内消費が頭をもたげ内需も10~15%を記録した。ネットレス加工では生産の1/4が対米輸出に当てられ、先払い形式による決済が見込まれているという。

真珠漁場として伊勢志摩はこれまでその80%が養殖されていたが、最近では漁場の老化から瀬戸内海、豊後水道方面に新しい養殖場ができ、仕上げ漁場として県外にイカダを移行する多角方式が強くなっており、業界でも漁場の実績割り当てを全国的にしようとの声が出ており、その対策に頭をひねっている。



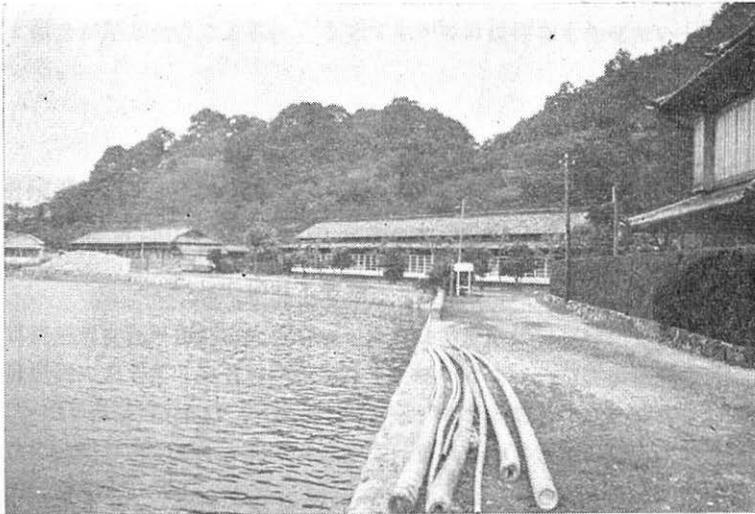
養殖場めぐり

—— 大村湾を巡る ——

太平洋資源
開発研究所 白 井 祥 平

今は早4年程前になるが、全国真珠漁協の九州出張の際研究会をかねて大村湾をみて廻つた事がある。丁度春で桜は満開、天気は快晴 — 今思つても旅なれた私でさえ楽しい思い出であつた。最近資料の整理をした処この時の資料が出てきたので悪筆をふるつてみた。時代のズレは御寛容の程、又いろいろお世話になつた田崎真珠社長田崎甚作氏、長崎県真珠組合の中島秀人氏、国研大村支所の皆様に厚く御礼申し上げます。

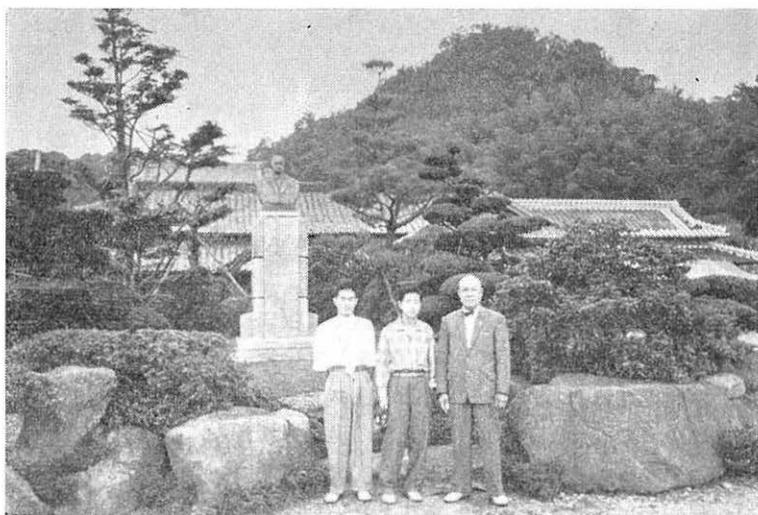
× × × ×



公園の様に美しい高島真珠養殖場

人一倍小柄な私が人一倍大きな体の田崎さんに連れられ訪れたのは高島真珠養殖所本社であつた。門というより鉄柵のようにいかめしい入口にはやはり伝統ある大国といつた貫録があらわれていた。何よりも驚いたのは「高島真珠前」というバス停がある事だつた。養殖場数多くあれど入口にバスが止り、而も専用（高島真珠しかない）というのは他に聞かない。更に二度びつくりしたのは、観光バスが見学客をのせて訪れるという事でもあつた。田崎さんは勝手に所といわんばかりにスタスタと事務所へ入られた。あいにく今日は休日で工場は閉鎖されていたが、高島真珠の主任さんからいろいろな話を伺う事ができた。

高島真珠の創業は大正2年大塔町で始められ、現在約800人の作業員と2万坪の漁場を有している。真珠作業の最盛期は9、10月で早岐水道に浮ぶダブル型の竹筏の列は壯観であつた。工場を一巡りして何より感じた事は汚ない管の工場全体がまるで大公園のようで、見学者にもきつと楽しい雰囲気と真珠に対する魅力を一層高める効果を与えるものと思つた。大抵真珠工場は汚ないものであるが、高島翁が梅の木千本を始め多くの植樹をされて美しい工場を建設されたのが今になつて一つの観光資源とさえなつているのである。いろいろ話を聞いたり歩いたりしている間に、田崎さんは先代高島翁の時代にずうつと養殖の仕事を担当され、今の主任さんなどはほとんど知合いであるとの事で、久しぶりの工場行で大変懐しそうであつた。

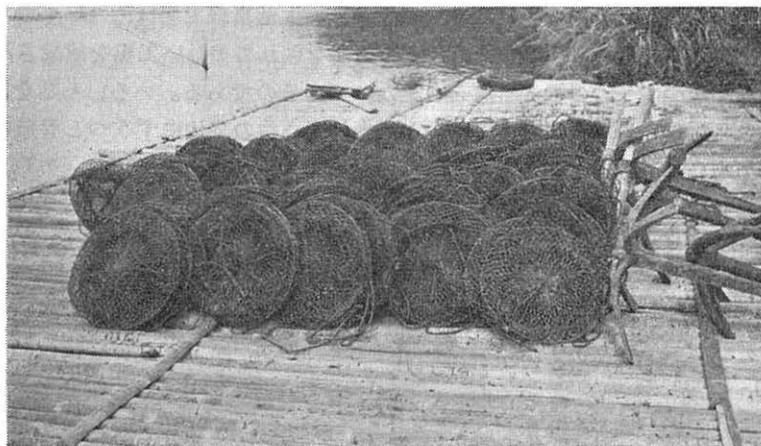


高島末五郎の胸像前（右より田崎氏、筆者、中島氏）

高島真珠を出て大村湾沿いに車でまわり、田崎真珠に向う。途中で聞いた高島真珠での昔話は我々新しい者には、珍らしく驚くべき話の連発で、ユーモラスな氏の話しぶりで長旅も愉快なものであった。

昔、母貝は三重県迄買いに行つたが、その頃は賢島の棧橋にもいつぱい稚貝がついていて、千円買うと百トンの船に山盛りあつたそうである。しかし佐世保迄の輸送は速く、安乗の船をチャーターして、61時間もかかり運賃は500円もとられたのでびつくりしたとか、ある年大塔でも沢山ついて、千万個の稚貝をとろうと計画し、石油カンに穴をいつぱいあけて中に收容して飼育したりした。

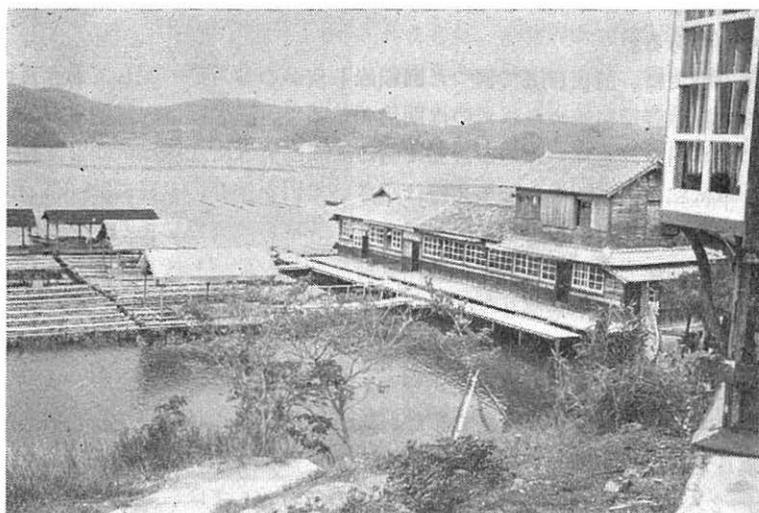
現在九州で使われている綿糸籠は田崎さんが養殖を始めた頃（昭和8年）金網籠が1個90銭もしたので、魚の生すからヒントを得て古漁網をかつて作つたのが広まつたものである。



田崎氏の考案による綿糸カゴ

九州で9人も真珠養殖を始めた頃、和具では堀口初三郎氏一軒で、賢島には一軒も家がなく、的矢では早くから仕事をしていた。又当時高島真珠での給料は500円で、世間では飛行機が飛び始め、山スレスレ位しか飛べなかつたので、我々は山の上まで登つてみた。九十九島の漁場まで船をこいで行つたが、海がしけた時には半型を入れた貝を陸にあげてまつていて、明けてから又持つて行つたが、貝を海に入れても乾燥して沈まないの、竿で叩いて沈めたり全く出鱈目なものでした。と昔話はずきない。

車は西側に大村湾を見て、しばらく山道を行くと、山岩真珠の工場がある。広い水域に竹筏が整然と並び、三重とは雲泥の差がある。西海国立公園にふさわしい静かな眺めであつた。その内に要塞名残りの巨大なコンクリート塔が3本あり、まもなく本通りからそれて山畑道を下ると大串村伊ノ浦の田崎真珠についた。この付近には岩永謙吉、西村磨瑛登養殖場がある由。実際は大村湾口伊ノ浦瀬戸を出ており、海況もはるかによいそうである。海に面した工場は一寸した水族館のように海の上に建設され、基地筏も整然として美しい。丘の上に建てられた田崎宅に案内されいろいろ伺つた。



田崎宅より見た田崎真珠工場

大変研究面に努力が払われ、我々の理想としている点についても考慮が払われているのに感心させられた。筏はダブルの竹筏で主として綿糸籠を用いるので、軽く便利である。この付近では丸カゴが半分を占め、三重で言われる様な籠の種類による差は認められない。ここの特徴は、筏は使わぬ事で、どうしても木筏では密殖になるからである。竹筏の場合シングルはローリングが強く連結網が切れるのでダブルがよい。連結も六番線を三重によつて竹に穴をあけ、カンをつけてつなげば風波にたえる。イカリはあまり強いものを入れると無理があつてきれる。ここの漁場は大村湾の内水が流れこみ、夏期30度以上にならず適温期が長いので有利である。九州の技術である後付けについて聞くと、ほとんどが同時付けで、大玉の場合のみ後付けにするそうである。

付着物はシロボヤに、フサコケムシが多く、真珠では稜柱層真珠が多く、貝肉は黄色で失調気味であるという。

車は更に大村湾の西側を廻り村松地区に走る。ここには久松、西村、楠木氏の養殖場がポツンポツンとみられ、大変広大な感をうけた。この付近の海は内湾で、水深が浅いため竹をたてて筏を支えている。道端に白い珪石が沢山ころがつている。山は背斜構造で、珪石や雲母が多く珍らしかつた。道はガタガタの山道で、同行の中島さん共々長崎の町についた時はくたくたであつた。しかし始めて訪れた私のために田崎さんはハイヤーを用意して下さつた。ハイヤー会社社長の顔ですよ………と耳打ちされて今更乍ら田崎さんの事業振りに敬服した次第である。

冗長ついでに、前夜自宅で伺つた回顧録も何かの参考迄に記しておきたい。大村湾で真珠養殖が始められたのは明治40年頃で、横山氏が大村伯爵のお嬢様を貰つて半円真珠を作つたのが最初である。高島真珠養殖所は大正2年に創業し、3年に私は入所した。この当時は小さい半円を作り、1貝に3~6個、大きいものは1個入れて、大きいといつても9ミリ位が最高でした。ロウ石核を入れ10万個位作業した。大正12年に西川式特許20件を使用して真円真珠を作り始め、ドブ核で8ミリが最高2個入れてでした。昭和になつてから9ミリが作られ、貝はレンガで区切りをして竹をたて地播きをしていた。大玉では4~5年、小玉で3年巻かせ、九十九島が漁場であつた。採集した玉は神戸のプロカーに売り、当時浜揚げは奴当り40円位でした。私は昭和8年に大串村で独立創業し、真円真珠を作つた。サイズは厘玉から10ミリ迄の全サイズで貝はダブルの竹筏に1.5~2メートルの深さに吊した。この頃の業者としては、高島真珠、長崎真珠、大村湾真珠、西村清太郎、西村磨磋登、楠木三徳、西川新十郎、浦里健作の各氏であつた。籠は丸アミカゴを使用し、大村産母貝を用いた。昭和17年に戦争のため中止、20年終戦により再開、岩永氏と2人で始めた。今当年モノといわれているものは、私が昭和8、9年に2年稚貝に作つたのが始めてであつた。加工開始は昭和5年に高島で、同29年には田崎で行つた。

参考資料 昭和2.3年の高島真珠に於ける施術貝200万個に対する経費

15,000円	母貝 (30万個)	12,000円	原料 (40万個)		
46,800円	給料 (技術 100人 海事 30人)	4,000円	人夫費 (8,000人)		
24,000円	金網 (4万個)	6,000円	木筏 (300台)		
2,000円	コールター (2,000カン)	1,500円	針金 (200丸)		
3,000円	消耗品	5,000円	漁場料	20,000円	本、支店経費
10,000円	特許料	1,000円	組合費		

堀口初三郎氏の業績から

全真連 久米村 優
販売部



故堀口初三郎氏

去る5月5日真珠業界は真珠共同販売体制の生みの親堀口初三郎氏を失いました。生前氏は戦前、戦後を通じて業界のために尽され、特に戦後の真珠業界の復興には天分の誠実さとその政治性を持つて努力され、真珠養殖協会→真珠養殖漁業協同組合→全国真珠養殖漁業協同組合と真珠業界の一本化に成功されました。特に昭和29年の真珠市価の著しい値下りの時は真珠養殖漁業協同組合長の要職にあり、真珠市価安定対策に日夜腐心され、協議に協議を重ねて翌30年4月真珠漁協を全国真珠漁協に改め、農林中央金庫より資金の援助を得て真珠業界としては画期的な無条件委託による真珠共同販売制

度々を打立てられ、自ら全国漁協組合長としてこの制度の遂行に努力されました。この結果真珠の市価は安定し、真珠業界は再び活況を呈し、安定生長を続けて参りました。

こゝに昭和29年11月6日真珠市価の暴落時の真珠漁協臨時総会議事録より抜粋の堀口初三郎組合長及び西岡光夫副組合長の二号議案「真珠市価安定対策措置に関する件」の上程説明要旨は、氏をはじめ業界主脳部が如何に真剣に真珠市価安定対策に取り組んだかを知る事が出来ると同時に、真珠共同販売制度の構想及びその当時の不安な業界の背景を知る事が出来ると思います。

..◇◇..

..◇◇..

..◇◇..

..◇◇..

戦後の真珠業界は昭和29年4月頃迄は比較的順調に推移して来たが、其の後

急速に市況が悪化し、同年10月に開かれた真珠養殖漁業協同組合主催の入札会では出品申込みは700点を越え（入札会の1日の処理能力は150点前後で普通2日間開く）不安感にみだされた。果してこの月の入札会は買気が全くなく市価はいたずらに低落するばかりであった。このため真珠漁協は真珠の浜揚期にも拘らず翌11月の入札会は中止して急遽臨時総会を開きこれが対策を協議した。以下

二号議案「真珠市価安定対策措置に関する件」についての説明

堀口 組合長

この問題は私が今更申す迄もなく、我々真珠業界にとつては非常に重大な問題で只今までの経過を御説明致しますから十分御審議願いたいと存じます。

本年（昭和29年）4月頃迄は我が業界も概ね順調で入札会もうまくいっておりましたが、6、7月頃から加工輸出業者内で金融引締めと海外の商況の悪化から市場が混沌として参りました。その後商工中金よりの4億円融資と特需等により少し持ち直し、秋には或る程度市価が維持されるよう思いましたが、10月入札会では換金希望と先安人気に支配され、出品が殺到し700点以上の申し込みがあつて不安な気分にあふられました。一方加工輸出業者は昨年我々生産業者から買つて、損をした経験から真珠の市価はまだ下るのではないかという不安でどうも買気がなく、皆さんに期待して頂くような値がしなかつた。それで之が対策に腐心して東京、神戸の加工輸出業者の有力者とも相談しましたが、たとえ11月入札会をやつても買気はないという事であり、そして値を維持するためには買取りを行いこれ以下には市価を下げないと言う最低線を引くことが肝腎だと言う事になりました。買取りを行うについては今迄の様な生産の野放しではなく、生産制限の必要があるわけです。この件について役員会で協議を重ね決定事項をお手許に配布しましたから十分御審議願いたい。

西岡 副組合長

11月の入札会を取止め買取りをやる事を東京、神戸側とも相談しましたが、之については生産は野放しではいけない。昨年度（昭和28年）の生産量3500貫 本年4500貫、来年は8000貫にも上る見込みであります。戦前の絶頂期の生産は3000貫で、大体野放しに商売しても可能な限度は3500貫位であろうと思う。このまゝでは買気がない。確かに生産制限はやらなければならない状態と思います。

真珠養殖事業法を改正して計画生産の実施を強化するための強力な国策的機

関を設置し、真珠養殖業者は悉くこの機関の指示を受けて生産に従事し、生産された真珠は全部この機関が買取り、之を加工輸出業者に販売するという案で進むのでありますが、法律の改正は仲々手間取るため、それ迄は生産制限を前提として次の様な案を協議しました。それは組合が評価委員会にかけて10月相場の1割高で買取るのでありますが、その内2割は保留し8割を1ヶ月～6ヶ月（希望により）の約手で支払い、希望者には割引致します。一方加工輸出業者の団体を作つて当組合で買った珠を無条件で買取り、入札会で90日の約手で加工輸出業者に売ります。売れなくて損をした時は当組合で保留した2割の限度迄は我々組合で補填し、それ以上の損は加工組合で負担することとして、その計算はサイズ別合算により算出する案であります。これには生産制限を前提として買取り側の加工組合の成立、中金の買取り資金の承認等むづかしい問題もありますがどうしても何とかやりとげなければなりません。これによつて価格安定の最低線を引くわけです。

この臨時総会において次の決議がなされた。

1. 法的措置により計画生産の実施を強化する為強力な国策的機関の設置を要望し実現すること。
2. この法的措置までの当面の措置として来年度の施術作業は原則として2ヶ月間とする。
3. この実施に当つては農林大臣の勧告を求むること。

以 上

..◇◇.. ..◇◇.. ..◇◇.. ..◇◇..

今日真珠業界は多くの難問題を抱えながらも、全国真珠養殖漁業協同組合連合会、日本真珠輸出組合、日本真珠輸出加工協同組合、日本真珠振興会、日本真珠事業者協会等を中心にして絶えず前進を続けております。又真珠の輸出額も昭和37年度は16,800貫、150億円強の記録を示しました。一方養殖面では全真連（会員は30組合）を中心にして安定成長を続け、故堀口初三郎氏真珠共同販売制は全真連の施策の中に生かされ、真珠市価安定に大きな役割を果たしております。我々はこの先人の足跡を踏石にして真珠業界の将来をより安定生長させて行きたいものです。

編 集 後 記



◎皆様のお手元に第一巻第4号をお送り致します。

今回は御木本真珠会社大西氏の論文を掲載致しました。この論文は最近問題になつているアコヤ貝寄生虫セルカリアについて説明された貴重なものであり、これにより寄生虫の実態がどんなものであるか良く解るものと思います。

又アサヒ真珠株式会社々長西岡光夫氏の真珠業界の現況の論文は、氏の真珠業界に対する持論でもあり又将来の真珠業界のあり方を示したのと言えらると思います。

三重県南勢町船越の尾田氏のカクテルライト照射による真珠養殖方法は、新しい真珠養殖方法として画期的なものであり経費の問題さえ解決されるならば将来有望な方法と思われます。

◎去る5月5日真珠業界の巨星堀口初三郎氏が亡なられました。氏の真珠業界に残された足跡は筆舌に尽し難いものでありますが、ここに昭和29年真珠市価大暴落時の氏の御努力の状況を真珠養殖漁協の議事録より掲載致しました。

◎長らく雨のため真珠養殖場では非常な不便を担うと同時に作業員に対しても細心の注意が必要な事と思います。当分は雨が続く気象との事ですので今後も作業員には充分注意して下さい。



パールチン

養殖真珠用

養殖真珠業者の皆さん

今年こそ真珠栄養素パールチンで、成果をお上げ下さい。
本年のような気候不順な時にこそ一層の効果をあげます。
パールチンの御使用を特におすすめ致します。

本社及工場移転御挨拶

降而弊社もお蔭様にて業績振展致しまして従来の事務所工場では狭少になりましたので左記へ六月一日より移転しました何卒相変らず御引立の程をお願い致します。

パールチン製造発売元

大阪市浪速区芦原町一二一一番地

日本レシチン化学工業株式会社

電話(五六)三三九一〜三番

販売代理店 神戸市生田区加納町

二丁目一ミヤコビル

甲 南 株 式 会 社

電話神戸(三三)八二一七番

全 神戸市生田区加納町四丁目

株式会社 森 正 商 店

電話神戸(三九)二二八二番

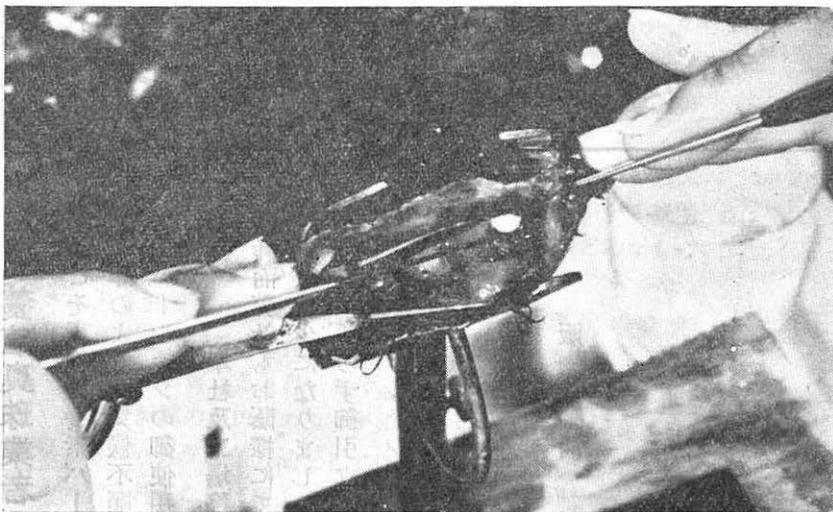
製 造 発 売 元



日本レシチン化学工業株式会社

大阪市浪速区芦原町1211番地

電 話 (561) 3391~3



挿核施術の前後に...

- 挿核貝を細菌からまもるために
- 挿核貝の回復と治療に
- 挿核貝の斃死予防に
- 真珠の品質と歩留向上に

真 珠 養 殖 用



パールアップ



製造 日本レダリー株式会社



販売 武田薬品工業株式会社

販売特約店 平本 末次郎商店
三重県伊勢市本町島居通り

昭和38年6月15日発行

第1巻 第4号会報

(通巻第43号)

三重県伊勢市岩瀬町84番地ノ2

真珠会館内

発行所 全国真珠養殖漁業協同組合連合会

電話(伊勢局代表)4147番

編集責任者 浜 本 忠 史

三重県伊勢市岩瀬町140

印刷所 神都印刷株式会社

電話(伊勢局)2230番